

県営圃場整備事業

—緊急発掘調査報告—

SI BOU  
芝 王 遺 跡

1984

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

県 営 園 場 整 備 事 業

—緊急発掘調査報告—

SI BOU  
芝 王 遺 跡

1984

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

## 序

長野県伊那市富士新山地区で現在確認されている埋蔵文化財包蔵地は10ヵ所を数えます。この10ヵ所の遺跡はほとんど破壊されることなく数千年間地中に眠り続けてきました。ところが、他地区と同様にこの新山地区にも開発の波が押し寄せてきて、遺跡の現存保存が不可能な事態になってきました。このような状況でありましたから記録保存の措置をとって、記録によって後世に伝える方策を講じました。

この度、南信土地改良事務所が主体となって実施した県営圃場整備事業（新山地区）には芝王遺跡が該当するとのことで、工事着工以前に伊那市教育委員会が委嘱した発掘調査団によって緊急発掘調査が実施されました。

調査は7月中旬から10月上旬の約3ヶ月間の長きに及び、ある時は梅雨、ある時は酷暑、ある時は台風の風雨に悩まされましたが、多大な成果を収めることができ、喜びにたえません。

芝王遺跡の成果は奈良から平安時代にかけての竪穴住居址16軒、中世の竪穴12基、中世の柱穴群がありました。

最後に、調査報告書の発刊にあたって、南信土地改良事務所職員一同、調査団の諸先生、発掘作業員の皆様に衷心より謝意を捧げる次第であります。

昭和59年3月8日

伊那市教育委員会

教育長 伊澤一雄

## まえがき 芝王遺跡の環境

### 位 置

芝王遺跡は長野県伊那市富県新山四方部落の東端に位置している。芝王遺跡に至る最短距離の経路は次の通りである。国鉄飯田線伊那市駅を下車して北へ 500 m 程県道を行くと入舟町という繁華街がある。

この繁華街を右折して天竜川にかかる大橋を渡り、杖突街道を高遠の方向へ向って約 5 km で美篶上原の信号機を付設してある交差点に至る。この交差点を右折して 1 km 程南東へ行くと三峰川に達し、三峰川橋を渡り、500 m 程で三叉路に着く。この付近一帯を押出と呼んでいる。名を示すよう地形の最末端であり、後背の台地がいかにも押し出しそうになっている。

この位置で進路を右手にとれば富県桜井区に至り、左手にとれば高遠町あるいは新山に至る。遺跡地に至るには左手の道路を、右手の眼下に新山川を見て、川沿いに東へ 2 km 程行くと、いわば新山地区では最も中心地と考えられる部落に着く。この中心地には新山小学校・富県農協新山事業所・新山保育園・新山老人憩の家等々の公共の建物が建ち並んでいる。この付近で、左折して蛇行している細い道を北へ進み、途中で右折して東へ行き、道が行きどまつた付近が芝王遺跡である。先述した細い道を直ぐに北へ進むと、眼前に宝勝寺の茅葺の屋根が見える。

### 地形・地質

竜東地区には赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈が南北に走っている。新山地区は伊那山脈より遼なる小さな山々によって周囲が取り囲まれ、わずかな谷間に小単位の集落が形成され、いわば山村集落の典型的な形態をなしている。

伊那山脈の地質は諏訪湖の南側の平坦な山地を構成する塩張累層・守屋山周辺の第三紀層・領家変成岩類・領家花崗岩類・鹿塩片岩磨基帶等々に大別できる。

竜東地域の地形・地質は三峰川の成因及び変動によって左右されたと言っても過言ではない。伊那市全域の水系に大般共通する問題として次があげられる。後背山地を流域とする水系で、流域の小さい水系が多い。ただし、三峰川は前述したのに該当しない。従って前述した状況であるが故に、豪雨、豪雪、梅雨時等の時に流量が増大し、洪水の危険性を多く含んでいる。

次に、第 1 節位置の所で述べた新山川について触れておく。新山川は伊那山地新山峰にその源があり、途中、小松川や幾多の流れをまとめて北へ流れ、押出付近で三峰川に注ぎ込み、三峰川の主要な支流である。こう配も急で、直流し、季節的に流量及び流質の変動が顕著であり、流路距離がみじかい。従って水害を起しやすい状態である。

遺跡地付近の東と北側には小河川が流れており、氾濫がしばしばあったとみて砂層の堆積は厚く、何層にもなっていた。発掘地点は安定した台地でローム層の堆積で覆われていた。

## 歴史的環境

富県地区遺跡分布図で掲載したように、現在、新山地区で確認された遺跡は10カ所を数える。これらの遺跡名と、各々の遺跡で検出された遺構・遺物を記してみると次のようになる。

北林遺跡は縄文中期。今泉遺跡は縄場式、勝坂式の土器片、打製石斧、磨製石斧、奈良尾遺跡は打製石斧。舟ヶ洞遺跡は縄文早・前・中期土器片。芝王遺跡は弥生後期土器片、土師器・須恵器、灰釉陶器片、打製石斧。中平遺跡は加曾利E式土器片。宮原遺跡は勝坂式、加曾利E式、加曾利B式の各土器片、打製石斧、石錐、大型石匙等の石器。合の原遺跡は縄文中期堅穴住居址1軒、勝坂式、磨製石斧、敲石、凹石、石皿、木炭。小松遺跡は加曾利E式、打製石斧。和手遺跡は打製石斧。以上が前述したように新山地区の遺跡である。

次に富県地区の遺跡について記すことにする。大塚古墳は直径15.3m、高さ2.15mで横穴式石室。上垣外遺跡は加曾利E式土器、石錐、磨石。宮の花遺跡は中島式土器、石包丁、磨石錐、管玉、土師器、綠釉陶器。まこもが池遺跡は弥生後期堅穴住居址1軒、弥生後期土器。御殿場遺跡は勝坂期堅穴住居址5軒、加曾利E期堅穴住居址11軒、縄文中期初頭土器、勝坂式、加曾利E式、石錐、打製石斧、磨製石斧、石匙、石皿、凹石、磨石、石棒、土偶、弥生時代の磨製石錐、平安時代堅穴住居址3軒、土師器、須恵器、灰釉陶器、鐵錐、鎌。

菖蒲平古墳は円墳で、直刀、刀子、轡、鉗具、鐵錐、鐵環、金環、鐵釘、管玉、須恵器が出土。テマテ古墳は円墳で、直刀、須恵器が出土。テマテドウセギ古墳は円墳で、直刀4振、勾玉、小玉、管玉、須恵器が出土。根木谷古墳はかつては三基存在しており、いずれも円墳で、直刀、刀子、管玉、小玉が出土。根木谷中畑遺跡は打製石斧、磨製石斧、平安時代堅穴住居址6軒、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土。

手間手遺跡は加曾利E式、打製石斧、石錐、石匙、奈良時代の須恵器が出土。不幸路遺跡は勝坂式、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿、石錐、須恵器が出土。八人塚遺跡は下島式、加曾利E式、掘ノ内式、石錐、打製石斧、石錐、石匙、弥生時代の管玉、土師器、須恵器、輪羽口、内耳土器が出土。小御堂遺跡は勝坂式、加曾利E式、弥生中・後期土器、平安時代堅穴住居址2軒、土師器、須恵器、灰釉陶器出土。阿原古墳群は六基の古墳より成り、全て円墳であり、六号墳は発掘調査が実施され、直刀、鐵錐、土師器、須恵器が出土。

高岱遺跡は加曾利E式、石錐、打製石斧、磨製石斧、局部磨製石斧、石皿、大形石匙、石錐、土師器が出土。蟹玉古墳は方墳で、一辺15.0m、高さ1.5mを計る。羽根原遺跡は土師器、須恵器、灰釉陶器出土。羽根田遺跡は土師器、灰釉陶器、鐵釘出土。駒合古墳は方墳で、南北12m、東西16.8m、高さ1.05mを測る。三ツ木遺跡は縄文早期積石遺構18基、押型文土器、撫糸文土器、弥生後期堅穴住居址2軒、中島式・古墳時代堅穴住居址4軒、土師器、須恵器、平安時代堅穴住居址1軒、土師器、須恵器、灰釉陶器出土。駒ヶ原遺跡は打製石斧、磨製石斧、石錐、石棒、土師器出土。

新山地区は一山越えれば中沢に至る。このような地理的条件からして中世では中沢氏の支配した中沢郷の北部地域に属していたものと思われる。その存在を決定づける証拠として四方の地蔵堂にある木造地蔵菩薩坐像があげられる。この地蔵像については「伊那市の文化財」に次のように記さ

れている。

「伊那市有形文化財彫刻に昭和52年10月29日に指定。像高63cmの檜材寄木造りで眼窓、布下地漆箔、白毫は欠失している。円頂で衲衣に袈裟を着け、その端は左肩を覆い、左手は掌上に宝珠を捧げ、右手は五指を捻じて錫杖を執る。頭部は一本木で、体型は前後を肩で矧付け、肘先は袖先で手首を矧付け、膝前は横に矧付け、要先もまた矧付けている。右手の第二指は後に補ってあり、第五指の先を欠失しているが、全体によく保存されている。相好豊かで眼は半眼に、唇はよく引締って安靜な面貌を示し、肩の張りが大きく、肉どり豊満で、かつ、よく締り、三道も美しく整調されている。



富県地区遺跡分布図

遺跡の名称

① 北林	② 今泉	③ 奈良尾	④ 芝王
⑤ 舟ヶ洞	⑥ 中平	⑦ 宮原	⑧ 合の原
⑨ 小松	⑩ 和手	⑪ 大塚古墳	⑫ 上垣外
⑬ 宮の花	⑭ まこもが池	⑮ 御殿場	⑯ 葛蒲平古墳
⑰ テマテ古墳	⑯ テマテドウセギ古墳	⑯ 根木谷古墳	⑰ 根木谷中畑
㉑ 手間手	㉒ 不幸路	㉓ 八人塚	㉔ 小御堂
㉕ 阿原古墳	㉖ 高岱	㉗ 玉古墳	㉘ 羽根原
㉙ 羽根田	㉚ 駒合古墳	㉛ 三ツ木	㉚ 駒ヶ原

る。衣文のたたみが複雑であるが深く抉り、穂高く残した形法は美事で、銘はないが鎌倉時代末か南北朝時代の趣をよく伝えている地蔵菩薩坐像で、上伊那郡下では稀有の仏像である。尚、台座並びに光背は共に江戸中期以後に補われたものである』

遺跡地の近くにある宝勝寺の由緒・変遷については『伊那市寺院誌』によれば次のようになっている。『武田信玄の嫡穴山夫人鶴姫（永禄5年没）の為に天正18年に開いたと伝えられ、当時は大通庵と称したといふ。鶴姫の位碑と伝えられる。「大通寺殿福油山聚火大姫位」が残っている。元禄3年の検地帳には「境内四拾八歩宝勝寺建之」と記されて免租地になつてゐる』

付近には蓮台と言う小字名が存在しており、それを物語るかのように右側型の供養塔がある。かつては近くに墓地があったのであろう。

（飯塚政美）



木造地蔵菩薩坐像



石祠型供養塔

## 凡　　例

- 1 今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴う、土地改良事業で、第3次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
- 2 この調査は県営圃場整備事業に伴う緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、昭和58年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文草記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
- 4 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一、飯塚政美

### ◎図版作製者

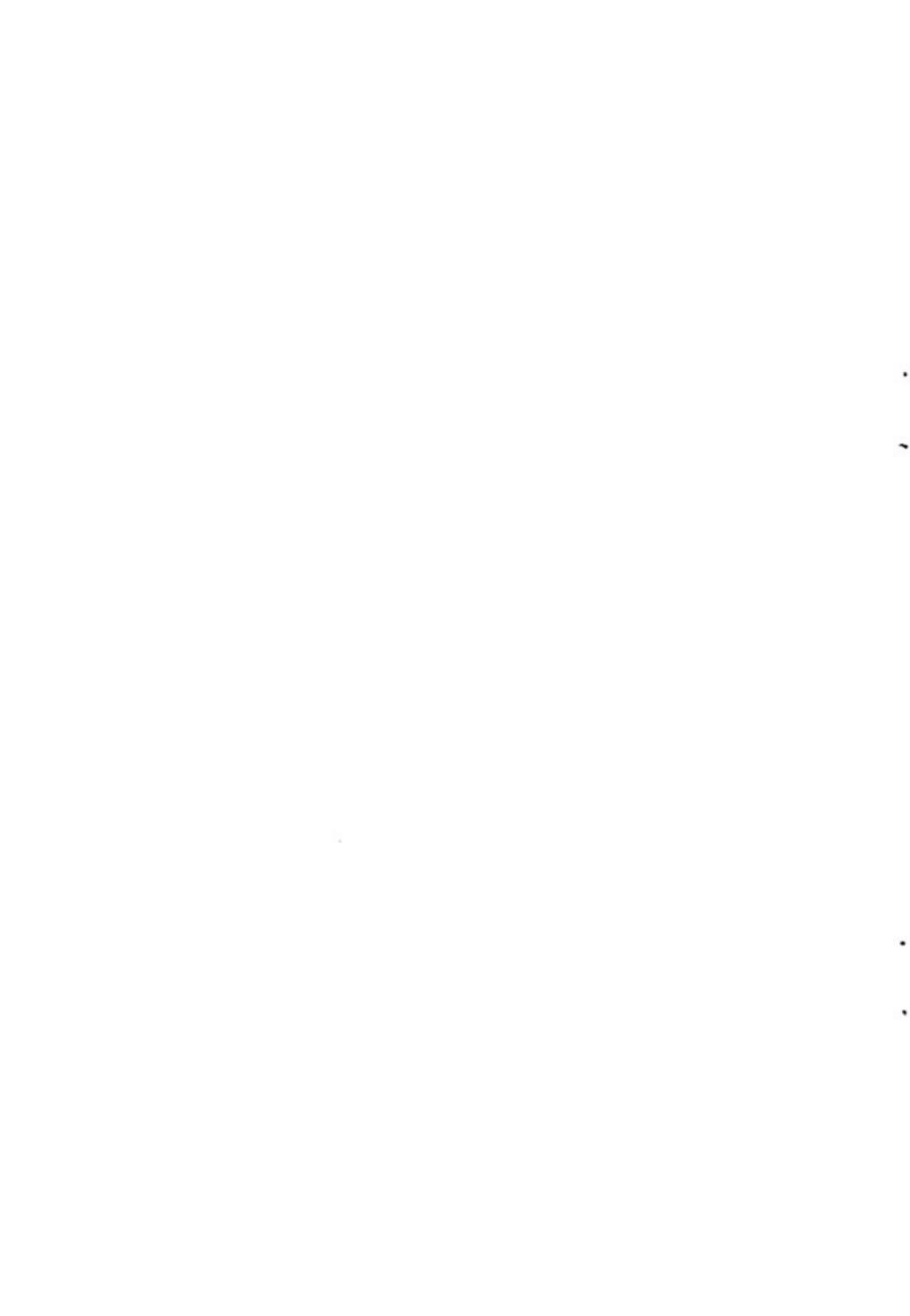
- 遺構及び地形実測図  
　　飯塚政美、小池 孝
- 拓　　影　　飯塚政美、小池 孝
- 石器実測図　小池 孝
- 土器実測図　小池 孝
- 陶器実測図　小池 孝
- 鉄製品実測図 小池 孝

### ◎写真撮影者

- 発掘及び遺構　友野良一、飯塚政美
- 遺　物　　友野良一、飯塚政美

- 5 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

# 芝王遺跡



## 目 次

### 序

目 次.....	(3)
挿図目次.....	(5)
図版目次.....	(6)

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	(7)
------------------	-----

第1節 発掘調査の経緯.....	(7)
第2節 調査の組織.....	(7)
第3節 発掘日誌.....	(8)

第Ⅱ章 遺 墓.....	(12)
--------------	------

第1節 古 代.....	(12)
(1) 第1号住居址.....	(12)
(2) 第2号住居址.....	(12)
(3) 第3号住居址.....	(16)
(4) 第4号住居址.....	(17)
(5) 第5号住居址.....	(17)
(6) 第6号住居址.....	(18)
(7) 第7号住居址.....	(20)
(8) 第8号住居址.....	(22)
(9) 第9号住居址.....	(23)
(10) 第10号住居址.....	(23)

第2節 中 世.....	(25)
--------------	------

(1) 第1号竪穴.....	(25)
(2) 第2号竪穴.....	(25)
(3) 第3号竪穴.....	(25)
(4) 第4号竪穴.....	(25)
(5) 第5号竪穴.....	(26)
(6) 第6号竪穴.....	(26)
(7) 第7号竪穴.....	(26)

(8) 第8号堅穴.....	(26)
(9) 第9号堅穴.....	(29)
(10) 第10号堅穴.....	(29)
(11) 第11号堅穴.....	(29)
(12) 第12号堅穴.....	(29)
(13) 柱穴群.....	(29)
 第Ⅲ章 遺 物.....	(30)
 第1節 土 器・陶 器.....	(30)
第2節 石 器.....	(44)
第3節 鉄製品.....	(45)
 第Ⅳ章 ま と め.....	(46)

## 挿 図 目 次

第1図 地形及び遺構配置図.....	(13)
第2図 第1～2号住居址、第1号、第11～12号竪穴実測図.....	(15)
第3図 第3号住居址実測図.....	(16)
第4図 第4・5号住居址実測図.....	(18)
第5図 第6号住居址実測図.....	(19)
第6図 第6号住居址カマド実測図.....	(20)
第7図 第7号住居址実測図.....	(21)
第8図 第8号住居址実測図.....	(22)
第9図 第9号住居址実測図.....	(23)
第10図 第10号住居址実測図.....	(24)
第11図 第1～12号竪穴・柱穴群実測図.....	(27)
第12図 土師器実測図 1住（1～13）.....	(31)
第13図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 2住（14～24）、3住（25～39）.....	(32)
第14図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 3住（40～63）.....	(33)
第15図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 5住（64～71）、6住（72～83）.....	(35)
第16図 土師器実測図 6住（84～103）.....	(36)
第17図 土師・須恵器実測図 6住（104～136）.....	(37)
第18図 土師・須恵器実測図 6住（137～147）.....	(39)
第19図 土師・須恵器実測図 6住（148～155）.....	(40)
第20図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 7住（156～168）、8住（169～183）.....	(41)
第21図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 8住（184～197）、9住（198～204）.....	(42)
第22図 土師・須恵器実測図 10住（205～221）.....	(43)
第23図 内耳土器・陶器実測図.....	(44)
第24図 石器実測図.....	(45)
第25図 鉄製品実測図.....	(45)

## 図版目次

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 遺構
- 図版3 遺構
- 図版4 遺構
- 図版5 遺構
- 図版6 遺構
- 図版7 遺構
- 図版8 遺物出土状況
- 図版9 遺物出土状況
- 図版10 遺物出土状況
- 図版11 出土遺物
- 図版12 出土遺物

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

富県地区の県営圃場整備事業は、昭和48年度、桜井地区に於いて最初に着手され、昭和49年度には貝沼地区で実施されました。幸いにも両地区には指定された遺跡は存在しなかつた。昭和51年度の事業地区には上原遺跡・小御堂遺跡・根木谷中畑遺跡が該当したために、工事着工以前に調査にかかる運びとなつた。

前述の遺跡発掘調査地区は水田地帯であったが、夏場施行であったために収穫等の問題で支障がなく、調査は割合に順調に実施された。発掘調査実施時期は上原遺跡では7月下旬、根木谷中畑遺跡は8月上旬～中旬、小御堂遺跡は9月上旬に行われました。その後、県営圃場整備事業は毎年小規模ながら実施され、新山地区は昭和56年度に初めて着手されました。

昭和57年度土地改良事業地区内に舟ヶ瀬遺跡が、昭和58年度には芝王遺跡が含まれました。芝王遺跡の調査を委託された場合は受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心にして、芝王遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとしました。南信土地改良事務所長と市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。費用は南信土地改良事務所負担額2,900,000円、文化庁負担額1,100,000円である。

### 第2節 調査の組織

#### 芝王遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委 員 長	伊澤 一雄	伊那市教育委員会教育長
副 委 員 長	福澤 純一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	赤羽 映土	伊那市教育委員長
調査事務局	三澤 昭吾	伊那市教育委員会教育次長

〃	竹松 英夫	〃	社会教育課長
〃	柘植 晃	〃	課長補佐
〃	武田 則昭	〃	係長
〃	高木いづみ	〃	主事

##### 発掘調査団

団 長	友野 良一	日本考古学协会会员
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会会员

## 第1章 発掘調査の経過

副 団 長 御子柴泰正 長野県考古学会会員  
調 査 員 福沢 幸一 タ  
タ 飯塚 政美 日本考古学協会会員  
タ 小池 孝 タ

### 第3節 発掘日誌

- 昭和58年7月11日 晴 発掘器材の修繕や点検及び準備をする。
- 昭和58年7月12日 晴 発掘器材の準備をする。作業内容は前日と同様であった。
- 昭和58年7月13日 晴 前の現場でテントを取りこわし、明日芝王遺跡の現場へ運搬できるよう準備し、発掘器材の上にシートをかけておく。
- 昭和58年7月14日 晴 発掘器材を芝王遺跡へ運搬する。テントを南北に長く二張り建てる。
- 昭和58年7月15日 雨 作業は中止する。
- 昭和58年7月16日 雨 土曜日だったので半日だけ、前日と同様な作業を行う。
- 昭和58年7月18日 晴 遺跡地の範囲が確認できないので、自然地形からみて、遺跡地の存在個所を正確に把握するために各所に分布調査的にグリッド掘りを実施する。
- 昭和58年7月19日 晴 前日同様にグリッド的分布調査を実施する。午前中は遺構の確認ができなかつたが、午後は多くの炭化物や焼土が検出され、精査してみると住居址の存在が濃厚となつてきた。プランをつきとめてみると住居址となり、第1号住居址とする。
- 昭和58年7月20日 雨時々曇 第1号住居址のプランを確認するために拡張していくと西側に統いて落ち込みが見られ、これを第2号住居址とする。第1号住居址の北側を拡張していくと落ち込みがみられ、第3号住居址とする。第1号住居址と第2号住居址の掘り下げを開始する。前述した天候ではあつたが遺構の上にテントを建てて作業を進めた。
- 昭和58年7月21日 雨 不順な天候であったが、昨日に引きついでテントの下で作業を進めていく。第1・2号住居址の掘り下げを続けて行い、夕方までかかって二軒の住居址の精査を実施する。これら二軒の住居址から灰釉陶器が出土し、平安時代の住居址と判明する。住居址の壁は、開田の際に大部分破壊されたとみえて、壁高は極めて低かった。カマドは残存していた。



現場にテントを建てる

昭和58年7月22日 雨 雨降りだったのでテントの下で作業をする。第3号住居址のプラン確認のため拡張を行うとともに、掘り下げを開始する。

昭和58年7月23日 曇時々曇 前日同様テントの下で発掘調査を続ける。第3号住居址をほぼ完掘し終える。第2号住居址の北側に竪穴が検出され、この竪穴を第1号竪穴とする。第1号竪穴のプランを確認するために精査していると、西側にもう一つ竪穴が発見され、これを第2号竪穴とする。この竪穴も夕方までかかってプランを確認する。

昭和58年7月25日 曙時々雨 第1号竪穴と第2号竪穴の掘り下げを実施する。そう大きな規模でなかったので、夕方までに完掘を終了する。

昭和58年7月26日 晴 久しぶりに晴天で梅雨が上がったようにみえた。最も有力な候補地である東、北側の畑の空地を掘り下げていくと、住居址が2軒発見され、住居址番号を第4号住居址、第5号住居址とする。空地以外の所は豆を栽培してあるので、一作上げてから発掘調査を実施するとの地主と話し合う。南側の空地に住居址が発見され、第6号住居址とする。

昭和58年7月27日 曙時々雨 グリット掘りを実施する。東、南の畑を重点的に掘り下げていくが、何も発見されなかつた。本日の状況からして住居址の存在範囲がある程度把握できた。

昭和58年7月28日 晴 南側の牧草畑の東側のグリット掘りを実施する。住居址が確認でき、第7号住居址とする。

昭和58年7月29日 晴 第7号住居址のプランを確認するためにプランの確認できそうな地区を把握する。夕方までかかって全体を確認する。

昭和58年7月30日 晴 第7号住居址は隅丸方形状プランであり、ベルトを南北に残して掘り下げを開始する。作業員が大勢であり、しかも壁が浅かったので、夕方までには一応、住居址の全体が把握でき、ほぼ掘り下げを終了する。

昭和58年8月1日 雨 雨の為に全面的に作業中止となる。

昭和58年8月2日 晴 第7号住居址の西側を掘り進めていくと住居址らしき跡が見つかったのでこれを第8号住居址と名付けて、作業を進めていく。

昭和58年8月3日 晴 昨日、検出された第8号住居址のプラン確認に全力を注ぎ込む。作業員皆さんを一ヵ所に集中して作業を進めしていく。

昭和58年8月4日 晴 作業を中止する。

昭和58年8月5日 晴 作業を中止する。



住居址の発掘

## 第1章 発掘調査の経過

昭和58年8月6日 晴 第8号住居址の掘り下げを実施する。

昭和58年8月8日 晴 作業を中止する。

昭和58年8月9日 晴 作業を中止する。

昭和58年8月10日 晴 第8号住居址の掘り下げを実施していくと本住居址の北東の部分に堅い所が発見され、さらに焼土が相当量あるいは土器片が多量に検出されたので第9号住居址と決め、プラン確認につとめるが、後世の擾乱が多量に認められ、住居址としてプランははっきりとつかめなかった。夕方までに第8号住居址の完掘を終える。第9号住居址の掘り下げを開始する。第3号竪穴、第4号竪穴のプランを確認し、掘り下げを終了する。

昭和58年8月11日 晴 第9号住居址の完掘。第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址、第1号竪穴～第4号竪穴の清掃をする。

昭和58年8月12日 晴 第1号住居址～第3号住居址、第7号住居址～第9号住居址、第1号竪穴～第4号竪穴の最後の清掃をし、写真撮影を済せる。毎日、晴天が続くので土地が乾燥してしまって写真を撮影するには不適当なので、水をまいた。

昭和58年8月17日 雨 台風5号、6号が本土に接近してくるとの情報が流れる。台風の影響による雨降りが続く。図面や遺物の点検を行う。

昭和58年8月18日 雨時々晴 午前中は雨降りであり、午後は時々晴れる。作業は前日と同じ事をする。

昭和58年8月19日 晴 第3号竪穴、第4号竪穴の北側に広がっている柱穴群の範囲を確認する。範囲がつかめたので、この一角を拡張する。

昭和58年8月20日 晴 柱穴群の拡張を進める。

昭和58年8月22日 雨時々曇 雨の為に作業中止、図面整理をする。

昭和58年8月23日 晴 柱穴群の拡張した部分の掘り下げを実施する。拡張した部分に方形の規模をもった落ち込みがみられ、これを第5号竪穴から第9号竪穴として、掘り下げを開始する。竪穴のなかから中世陶器片が若干出土した。柱穴は円形状や角状のが一般的であったが、その配列状態は不明であった。

昭和58年8月24日 晴 柱穴群の掘り下げ。柱穴群の東西セクションをとる。

昭和58年8月25日 晴 最後まで残しておいた野菜畑の作物をとりあげて掘り下げを実施してみると、住居址が発見された。これを第10号住居址とする。耕土はわずかに20cm前後であったので、午前中で耕土剥ぎを完了する。午後より第6号住居址と第10号住居址のプランは全作業員を集中的に送り込んだので夕方までには二軒の住居址のプランは把握できた。第1号住居址、第2号住居址、第1号竪穴の実測をする。

昭和58年8月26日 晴 第6号住居址を掘り下げていくと多量の遺物が出土した。完型に近い土師器の杯や皿が数個出土した。第3号住居址の実測、第6号住居址のセクションをとる。

昭和58年8月27日 晴 第6号住居址の完掘。第10号住居址の掘り下げ。第10号住居址は桑による擾乱が顕著であり、壁面はよくわからず、床面の状態によって、そのプランを把握する。第1号住居址のカマドのカッティングを実施。

昭和58年8月29日 晴 第10号住居址の完掘。第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址の実測。第4号住居址と第5号住居址の完掘。第2号住居址内の床面上に第10号竪穴から第12号竪穴の三竪穴が存在している。

昭和58年9月14日 晴 第4号～第6号住居址。第10号住居址の写真撮影、さらに第5号～第12号竪穴、柱穴群の写真撮影

昭和58年9月16日 晴 第4～5号住居址の実測を行う。

昭和58年9月17日 晴時々曇 第6号住居址、第10号住居址の実測をする。

昭和58年9月19日 晴時々曇 第1号柱穴群の実測。

昭和58年9月20日 雨 雨のため現場の作業中止、図面の整理

昭和58年9月21日 曇 第1号柱穴群の実測。

昭和58年9月22日 雨 雨のために全ての作業を中止

昭和58年9月24日 雨 雨のために図面の整理を行う。

昭和58年9月26日 雨 雨であったが第1号柱穴群の上にテントを建てて実測する。

昭和58年9月27日 雨 雨であったが前日同様の作業方法で第1号柱穴群の実測

昭和58年9月28日 雨 雨であったが遺構の上にテントを建てて作業を行う。第2号～第5号竪穴の実測

昭和58年9月29日 晴 前日と同じ作業方法で第6号～9号竪穴まで実測をする。

昭和58年9月30日 曇時々雨 遺構の上にテントを建てて第10号～12号竪穴の実測をする。全測図の作製

昭和58年10月1日 曇時々晴 現場のテントのとりこわしてあとかたづけをする。全測図の作製

昭和58年10月3日 晴 発掘器材の運搬

昭和58年10月上旬 図面の整理をする。

昭和58年12月～昭和59年1月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集 (飯塚政美)

昭和59年3月 報告書を刊行する。

#### 作業員名簿

酒井岩夫、登内政光、小池創、池上大二、三沢寛、大野田英、建石紀美子、大野田三千代、網野実子、埋橋程三、後藤重美、大久保富美子、酒井とし子、伊藤勝、蟹沢英幸、埋橋清、唐木由人、春日広子、小松善恵、元林久太郎、吉田虎子 (敬称略順不同)

## 第Ⅱ章 遺構

## 第1節 古代

## (1) 第1号住居址 (第2図、図版2)

本址は発掘地区の最北端部に位置し、西側で第2号住居址に切られ、北東の近くに第3号住居址が近接した所に発見された住居址である。本址の掘り込み面は表土層面から30cm位下ったローム層面を掘り込んだ堅穴住居址で、平面プランは隅丸方形状の形態を成している。

規模は南北4m25cm、東西(西側は第2号住居址に切られているために不明)を測る。推定するに構築時には東西の規模は南北とほぼ同じ数値を示していたものと思われる。壁高は20~30cm位の範囲内に含まれており、壁としては極めて低い。おそらくかつての開田の折に壁の上面は削りとられたのであろう。壁面は東では外傾に近く、軟弱気味。南では外傾気味で、凹凸が多く、堅い。北は垂直に近く、凹凸が多く、かたい。

柱穴らしき跡は10カ所程度検出されたが、主柱穴になりそうのは、全体的に浅かったのではっきりと把握できなかった。

床面はローム層のかたい叩きであり、全般的に良好であり、ところどころに凹凸が認められた。南壁直下、北壁直下、東壁北半分直下に幅15cm、深さ10cm位の周溝が回っている。床面より若干上った覆土中に多量の焼土が検出された。床面上に密着して柱や住居址の骨材に利用した木が炭化状で検出された。おそらく本址は火災にあったのだと思われる。

カマドは東壁中央部付近にあった。現在は大部分破壊されてはいるが石組粘土カマドの形態を残している。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、平安時代の住居址と思われる。

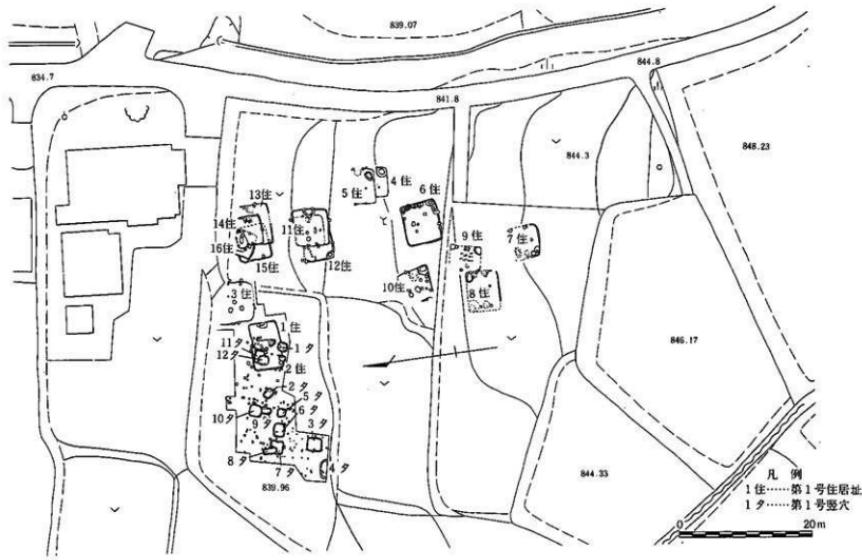
## (2) 第2号住居址 (第2図、図版2)

本址は東側で第1号住居址を切り、床面上で第1号堅穴、第11号堅穴、第12号堅穴に切られている。表土より30cm位下ったローム層を掘り込んで構築された堅穴住居址である。平面プランは隅丸方形を成し、その規模は南北4m40cm、東西は4m50cmを呈す。壁高は10cm~25cm内外を測り、その状態は凹凸が多く、軟弱気味である。

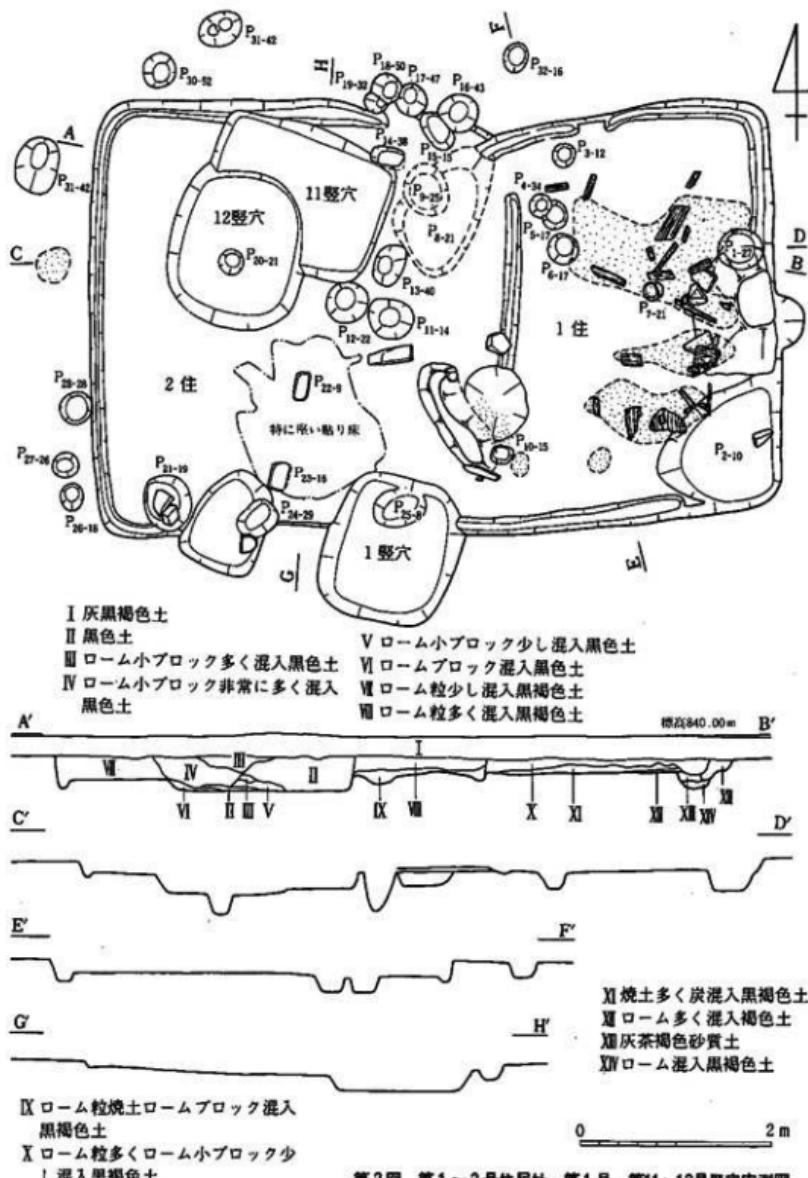
床面はかたい叩きで大体水平を呈していたが、部分的に特に堅い貼り床部分も認められた。北壁、西壁直下に幅18cm、深さ15cm位の周溝が回っていた。東側にわずかに周溝が認められる。

柱穴は数多く検出されたが、主柱穴になりそうのは深いほんの数本だけである。柱穴の配置の仕方として、住居址内と、壁外との二つに大別される。柱穴のなかには角状のものや底に石を置いたのもあり、あるいは列状になったものもあった。カマドは東壁、南側の角に残存しており、大部分は破壊されているが、当初は石組粘土カマドであったと思われる。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、平安時代の住居址であろう。

(友野良一)



第1図 地形及び遺構配置図



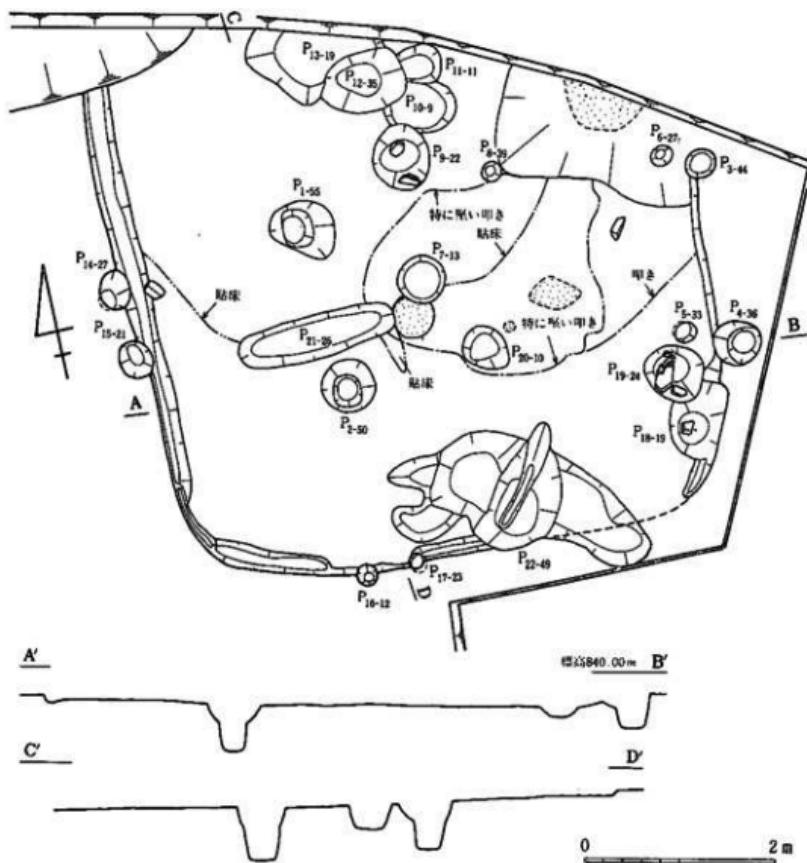
第2図 第1～2号住居址、第1号、第11～12号竪穴実測図

## 第Ⅱ章 造 壁

### (3) 第3号住居址 (第3図, 図版3)

本址は発掘調査地区の最北端部に位置して発見された。北側は土手を境にして用地外の為に南北の規模は当然ながら不明となっている。ローム層を掘り込んで構築され、隅丸方形の平面プランを呈する堅穴住居址である。

規模は東西6m, 南北は(前述したようなことから不明)を測る。一辆6mとは比較的大きな部類に属する住居址である。壁高は10~20cm位と低く、部分的に外傾気味で、凹凸が多く、歯弱であった。



第3図 第3号住居址実測図

床面は堅い叩きであり、ところどころに凹凸面が多くなっていた。床面の構築土層面はローム層であった。一部は貼り床や、特に堅い叩きも認められた。西壁直下から南西隅壁直下にかけて、幅20~30cm位、深さ10~20cm位の規模で回わっている。北側の土手直下に集中的にみられる焼土群はカマドの残がいと思われる。焼土に混じて粘土塊が残存していた。察するに本住居址構築時のカマドは石組粘土カマドであったのだろう。

柱穴は無数検出されたが主柱穴となりそうなのは、なにせ数が多いからよく把握できない。従って配列自体も不明である。ただ、主柱穴になりそうな手掛としては深い柱穴を拾い出すしかない。柱穴の中に石の入ったのも認められ、これは柱を置るために当初よりおいたのであろうと推測できよう。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、石器が出土しており、従って本址は平安時代の住居址と思われる。

#### (4) 第4号住居址（第4図、図版3）

本址は発掘地区の最東端、南北の中央部付近に発見され、ローム層面を掘り込んで構築された堅穴住居址である。平面プランは北側で、第5号住居址に切られてはいるが、現存している南側で推測してみると隅丸方形形状を呈すると思われる。

規模は南北は北側が第5号住居址によって切られてしまっているので、正確なる数値はのぞめないが、東西の規模に近い数値を示すのであろう。ちなみに東西の規模は4m35cmを測定できる。壁高は20cm内外と低く、残存している三壁面は垂直に近く、やや凹凸が有り、かたくなっている。

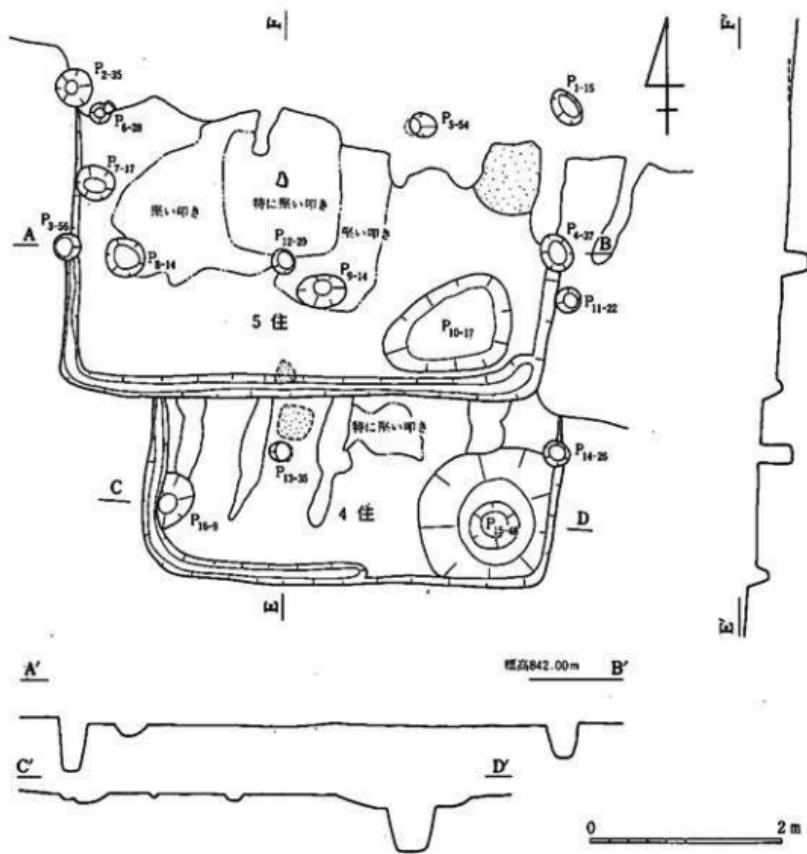
床面はややかたく、大般水平になっているが、ところどころに特にかたい叩きが認められた。同面の南西半分から西側にかけて、壁面直下に周溝が回っており、その規模は幅20cm、深さ5cm位であった。

柱穴は數カ所発見されたが、残存しているピットから察して当初は4本柱穴と思われる。カマドの姿はどこにも見当らないが、第5号住居址に切られるときに破壊されたと思われる。北側近くの一部に焼土が残存しているが、これがカマドの名残りであろう。遺物の出土量は極めて少なく、土師器、須恵器であり、奈良時代の住居址と思われる。

#### (5) 第5号住居址（第4図、図版3）

本址は南側で第4号住居址を切る状況で検出された。付近の状態は第4号住居址と同様であるので今回は省略する。規模は南北は不明、東西5m10cm程を測る。壁高は基盤が南から北へ傾斜しているために、南側は高くて30cm位、北は残存していないかった。これらの壁は構築時にはあったと思われるが、後世の擾乱によって上は削りとられたのであろう。残存している壁面は垂直に近く、かたく、凹凸は少なかった。

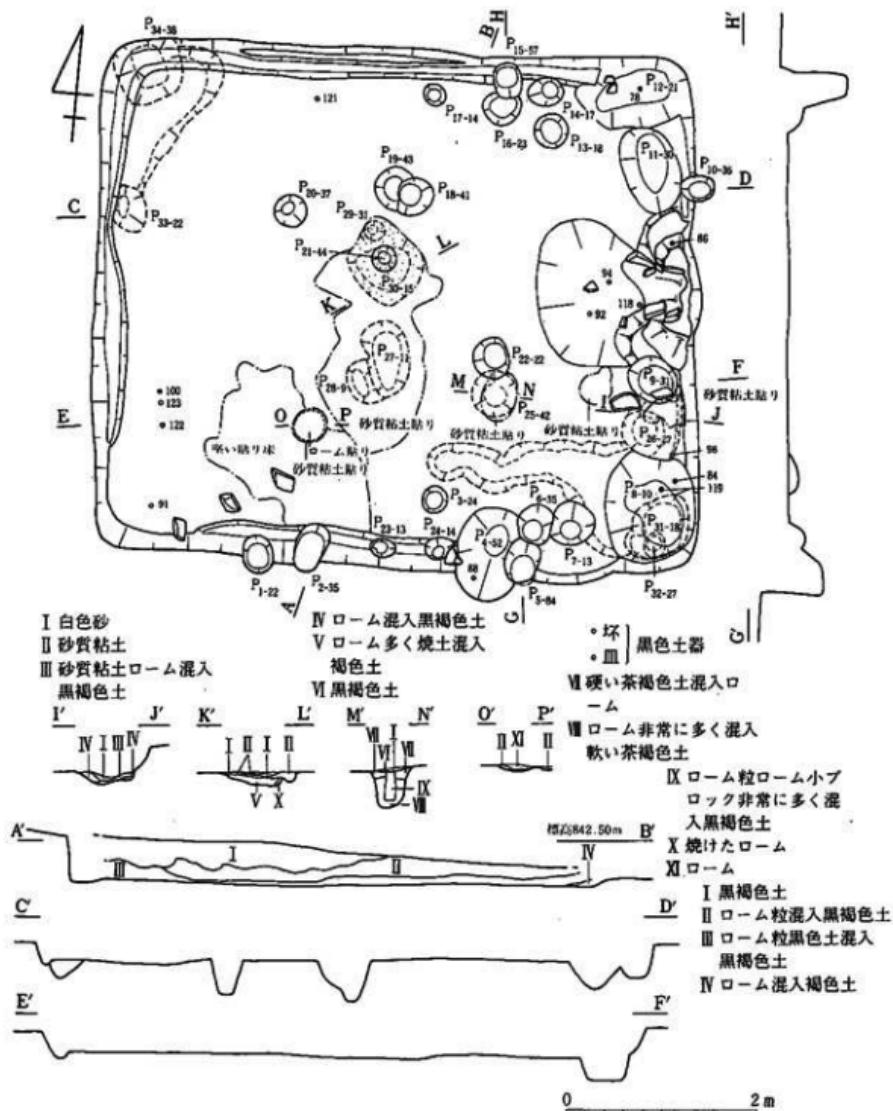
床面は西半分でかたい叩きで凹凸があり、東半分は砂の軟弱なたたきで、凹凸がややあった。南壁から、西壁にかけて幅15cm、深さ15cm位の周溝が回っていた。カマドの姿は破壊されてしまつてどこにも見当らなかつたが、床面上に散在する焼土はその痕跡であろう。四本主柱穴と思われる。遺物は土師器、須恵器が少量出土しており、よって本住居址は奈良時代と思われる。



## (6) 第6号住居址 (第5図、図版4)

本址は北側の位置に第4・5号住居址、西側の位置に第10号住居址がみえる所に発見され、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。平面プランは全般的に隅丸方形形状を成してはいるが、壁のところどころに出張った個所を認めることができる。規模は南北5m40cm、東西6m40cm位を測る。

ピットは34カ所発見され、そのうち主柱穴あるいは補助穴になりそうなのは、壁内では深さが30cm位であり、壁面及び壁外の柱穴は大部分南壁に集中していた。P<sub>1</sub>, P<sub>3</sub>のように斜め状にあけたのもあり、構築上興味深い。

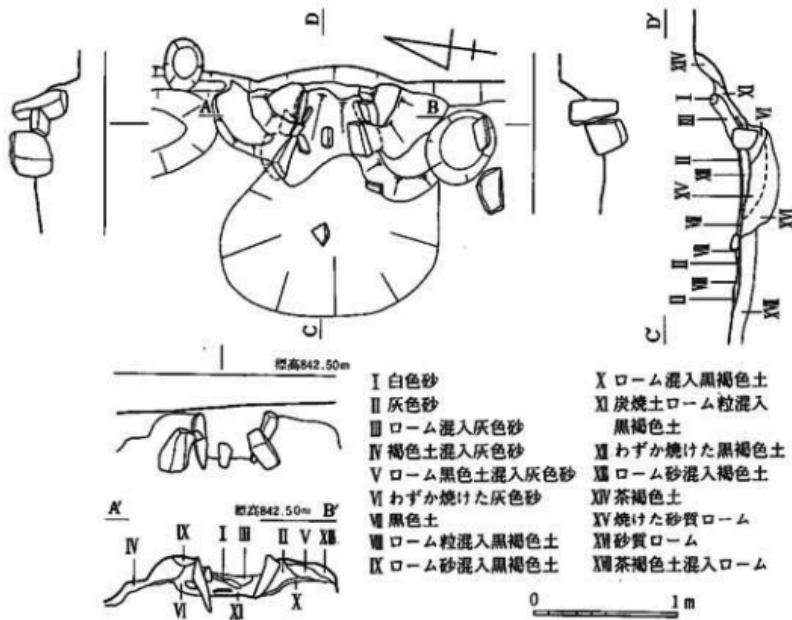


第5図 第6号住居址実測図

壁高は20~50cm位を計り、深いところと、浅いところがはっきりしていた。西壁、南壁は垂直に近く、堅く、凹凸があった。東壁、北壁は外傾気味であり、軟弱な状態を呈していた。床面はローム層のかたいタタキで、ところどころに凹凸があり、場所によっては砂でかたくかためたり、あるいは貼り床したところもあった。周溝がほぼ四壁にわたって全周していた。

カマドは東壁中央部付近に位置し、石芯粘土カマドの状態をなしており、その残存具合は極めて良好であった。その残存良好な個所としては南側と北側に多く粘土が残っていた。火床には焼土が多量に残存し、カマドの芯に使用した石は変成岩が多くかった。

遺物は土師器・須恵器が多量に出土した。土師器にいたっては大部分が墨書き土器であった。従つて本址は奈良時代の住居址と思われる。



第6図 第6号住居址カマド実測図

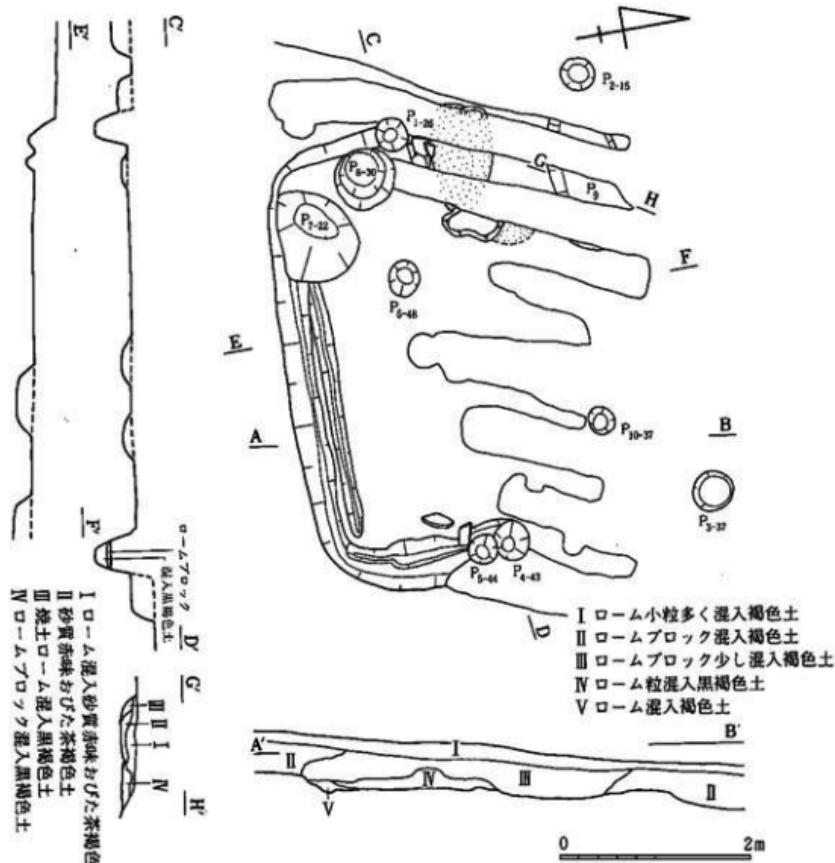
## (7) 第7号住居址 (第7図、図版5)

本址は発掘地区的最南端部に位置して発見された。本住居址を含めた、第8号住居址、第9号住居址は後世の擾乱が極めて顕著であったために、三軒ともそのプランははっきりしなかった。従つて、発掘調査されたままの現況を記しておく。

表土面から50cm位下ったソフトローム層面を掘り込んだ隅丸方形形状を呈する竪穴住居址を呈し、南北の規模は不明、東西の規模は4m75cmを測る。

壁高は15~30cm位を計し、南壁、東壁、西壁は壁面に凹凸が多く、わずかに外傾している。北東の一部の壁面がわずかに残存していた。この凹凸は耕作時によってつくられた第二次的なものと思われた。床面はわずかに堅いところが残っているだけであり、凹凸が多くなっていた。この凹凸も耕作時による擾乱である。柱穴は10カ所存在しているが、本住居址の全体的な把握ができないので、どれが主柱穴となるかは不明である。南壁直下の一部に幅20cm位、深さ15cm位の周溝が付設してあつた。

カマドは西壁中央にあり、当初は石組粘土カマドと思われたが、耕作時に破壊されたとみえて、わずかな石と多量の焼土が検出された。遺物は土師器、須恵器、灰陶陶器が出土し、よって本址は平安時代に含まれる。

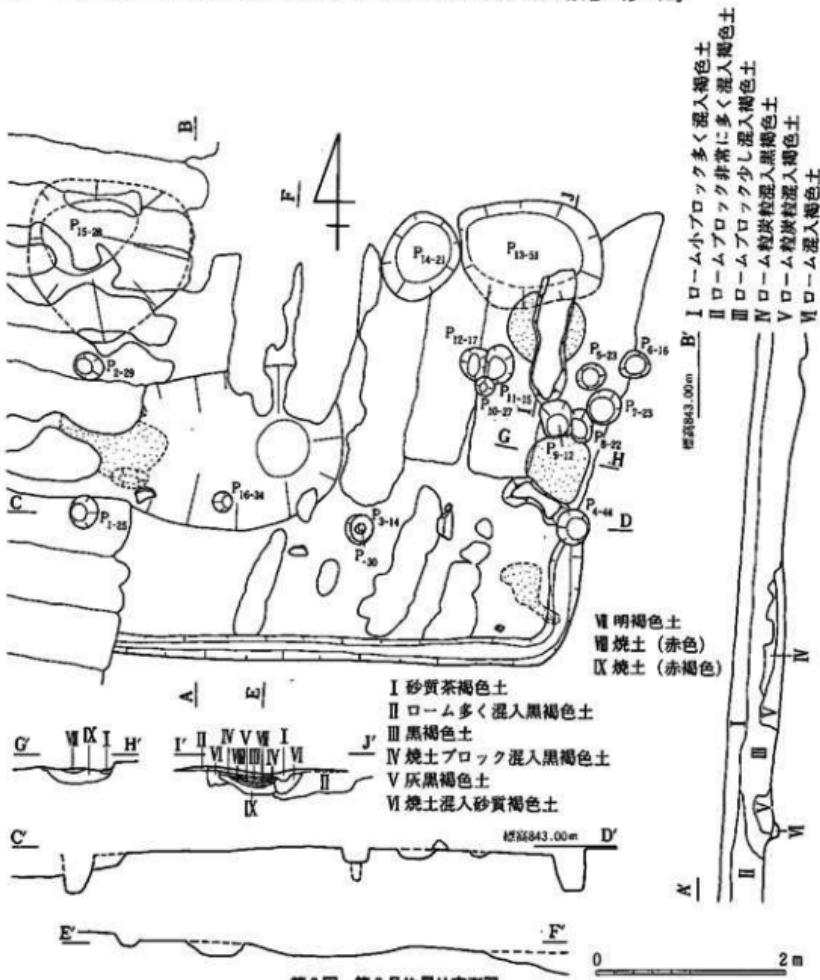


第7図 第7号住居址実測図

(8) 第8号住居址 (第8圖、図版5)

本址は東側に第7号住居址、北側に第9号住居址が近接した所に発見され、表土面より45cm位下  
ったソフトローム層面を掘り込んだ竪穴住居址である。規模は後世の擾乱がはなはだしいのでその  
実数はつかめない。プランは南西の一角落が残っていることから察して隅九方形状と思われる。

現存している壁高は15~20cm位であり、全般的に外傾気味で、わずかに凹凸がみとめられる。床面は住居址の南半分はかたくなっていて凹凸が多い。南東の隅の一角は砂混じりの床面であり；他はコーム層の床面であった。床面上には南北に耕作によるうねの跡が顯著であった。



第8圖 第8号性別比率測圖

カマドは東壁中央部と西壁中央部の二カ所に多量の焼土がみられるが、どちらがカマドかはつかめない。出土遺物の時代からみて、カマドは構築時は石組粘土カマドであったと思われるが、後世の擾乱によって大部分は破壊されてしまつて、わずかに焼土が残存しただけであった。

ピットは数多く発見されたが、後世の擾乱がいちじるしかつたので、どれが主柱穴となるかはよくわからない。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、平安時代の住居址と思われる。

#### (9) 第9号住居址（第9図、図版6）

本址は後世の擾乱が顕著であったために、規模、壁高、壁の状態は全くわからない。床面は大體、水平で、かたくなつてゐた。カマドは東壁の近くにあったと思われるが、現在は大部分破壊されてしまつてわずかに焼土が残存しているのみである。

床面のかたさと、焼土の状況からやつと住居址と判定した状況であった。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が少量出土し、従つて本址は平安時代の住居址と思われる。

#### (10) 第10号住居址（第10図、図版6）

本址は南側は第9号住居址、東側は第6号住居址にはさまれた西端部に発見された隅丸方形形状プランを呈する堅穴住居址である。掘り込み面までわずかに表土面から20cm位と浅く、従つて後世の擾乱が住居址の掘り込み面まで達してお

り、北壁と西壁は残存していないかった。

規模は推定南北4m75cm、東西5m位を測定できる。壁高は15cm～30cm位と極めて低く、従つて後世の擾乱も受けやすくなつてゐる。壁面の状態は凹凸が多かつた。

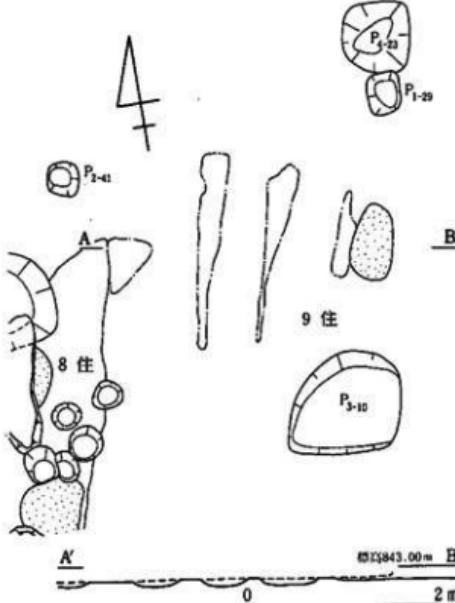
床面はローム層のかたいタタキで築かれており、部分的に砂礫混合土でつきかためられていた。南壁の一部分に幅20cm、深さ20cmの周溝があつた。

柱穴は數ヶ所発見されたが、全般的に浅いため、主柱穴はどのピットかは不明である。

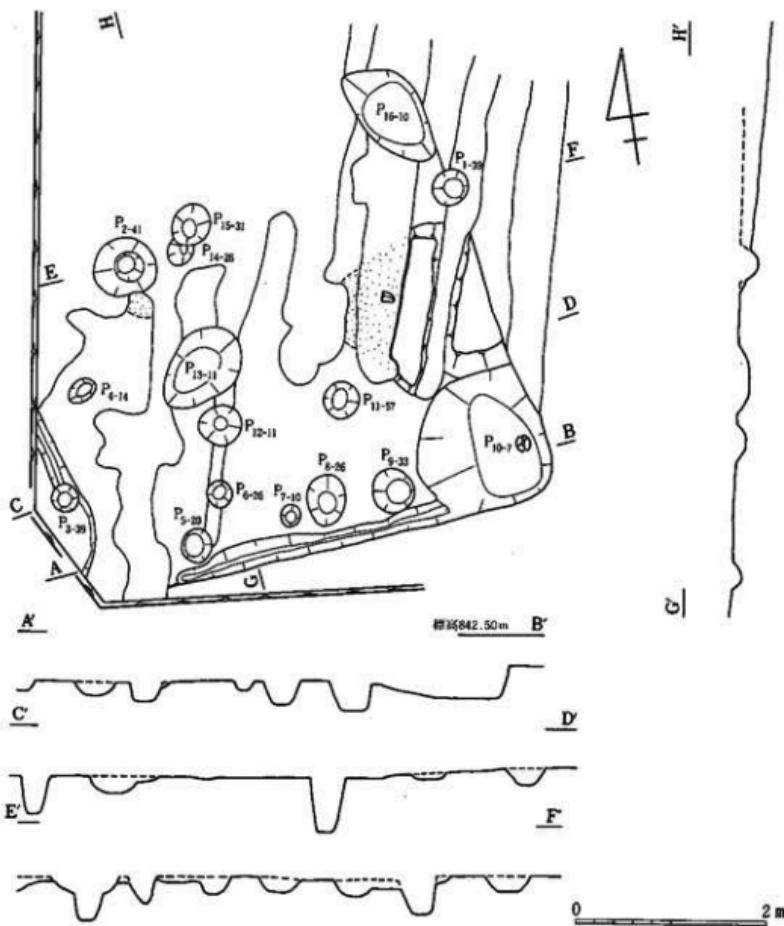
カマドは東壁中央部付近にあり、石芯粘土カマドであつて、この粘土は多くの砂を含んでいた。

遺物は土師器、須恵器が相当量出土しており、従つて奈良時代の住居址と思われる。

（飯塚政美）



第9図 第9号住居址実測図



第10図 第10号性居址実測図

## 第2節 中世

## (1) 第1号竪穴 (第11図、図版2)

第2号住居址の南壁を掘り込んで発見された竪穴址である。平面プランは隅丸方形プランを呈し、規模は南北1m50cm、東西1m40cm、深さは40cmを測る。壁はやや外傾気味であり、床面はローム層の堅い叩きとなっており、平坦である。

覆土中に焼けた変成岩や花崗岩が散乱していた。遺物は内耳土器の口縁部破片が出土していた。

## (2) 第2号竪穴 (第11図、図版7)

第2号住居址の西側に発見された竪穴址である。平面プランは隅丸長円形状を呈し、規模は南北1m73cm、東西1m28cm、深さ90cmを計る。断面は下部へ行くに従って方形状に面取りしてある。竪穴の上部はソフトローム層、中、下部はハードローム層より成り立ち、ハードローム層面にはノミ跡が顯著であった。

壁面の上部は外傾気味で、中、下部については垂直状に近くなっている。覆土は上部から底部まで黒色土が充満していた。本竪穴に関連するピットとしては、P109、P129、P128、P130があげられ、前の三つのピットは角状を呈している。床面上のP130に棒をさし込み、それを支柱にしてP109、P128、P129を結び、円錐状の屋根組みにしたのであろう。遺物の出土は何もなかった。

## (3) 第3号竪穴 (第11図、図版7)

今回発掘された竪穴の中で最南西部に位置して発見された竪穴址であった。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は南北2m28cm、東西2m、深さ28cm～38cm位を計る。覆土は黒色土が充満している。

壁は全般的に外傾気味で、軟弱であった。床面は大般水平で軟弱であった。床面上に等間隔で六本の柱穴を配し、壁外に竪穴を取り囲むようにして柱穴が六本等間隔で回わっている。床面上の柱穴はP11、P8、P12、P13、P9、P10であり、壁外の柱穴はP2、P3、P4、P5、P6、P7であった。P7、P6、P5、P4は角状であった。

遺物は中世の陶器片が出土した。

## (4) 第4号竪穴 (第11図、図版7)

本竪穴は今回検出された竪穴の中では最南端部に位置し、東側に第3号竪穴が隣接している。平面プランは東側は丸みを呈し、西側は隅丸方形形状を呈している。この状態は床面でわずかに段がつくので、円形プランの造構が隅丸方形形状プランの造構を切ったようなかっこくなっているものと思われる。

規模は切り合ひ関係のため、あるいは南側は調査不可能であったために実数は把握できなかつた。深さは25cm位を測り、壁面は外傾が強く、軟弱気味であった。床面は大般、平坦で軟弱気味であった。

覆土は黒色土が充満し、このなかに少量の木炭と燒土が検出された。東側の北壁直下に一抱もある大きな礫から、にぎりコブシ大の礫まで集中的に入っており、礫は変成岩や花崗岩が大部分を占めており、なかには焼石も含まれていた。遺物はなにも出土しなかつた。本竪穴は床面上、あるいは

## 第Ⅱ章 造 構

は壁外に柱穴は全く見当らず、ほかの堅穴と何か異質のように思われる。

### (5) 第5号堅穴 (第11図、図版7)

本堅穴は堅穴集中地区の大般中央部付近に位置し、西側に第6号堅穴、北側に第9、10号堅穴が近接している。平面プランは隅丸方形を呈し、南北1m25cm、東西1m25cm、深さ20cm位を計り、覆土は第11図に明示した通りである。

東壁と西壁は外傾気味で軟弱な状態を呈していた。床面は軟弱で、やや凹凸が認められた。柱穴は東壁に密接してP115、P116、P117、壁外にP86、P118、P112が存在している。北西の一隅に現在は柱穴がみられないが、かつてはあったものと思う。察するに四本主柱穴と思われる。遺物は何も出土しなかった。

### (6) 第6号堅穴 (第11図、図版7)

本堅穴は西側で第7～8号堅穴、東側で第5号堅穴にはさまれた所に位置し発見された。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は南北1m62cm、東西2m10cm、深さ17cm位と浅い。覆土は第11図のようである。

壁面の状態は西側は垂直に近く、他の三壁はやや外傾気味で、凹凸が多くなっている。床面は大般平坦で、軟弱を呈す。柱穴は西側の床面上に2個(P79、P80)南西の隔壁面にP81がある。南東隅の近くにP82、P83、P84が並んでいる。これらの柱穴の中に角状のもあった。北側に柱穴の存在が全くないのは、屋根の構えに特殊性があったのであろう。

遺物の出土は何もない。

### (7) 第7号堅穴 (第11図、図版7)

本堅穴は東側に第6号堅穴、北西隅は第8号堅穴に切られたかっこうで発見されている。ローム層面を10cm位掘り込み構築されている。平面プランは隅丸方形を呈し、南北1m88cm、東西1m95cmを計る。覆土は黒色土が大部分であり、覆土の上層面には多量の炭化物が一面にわたって覆っていた。

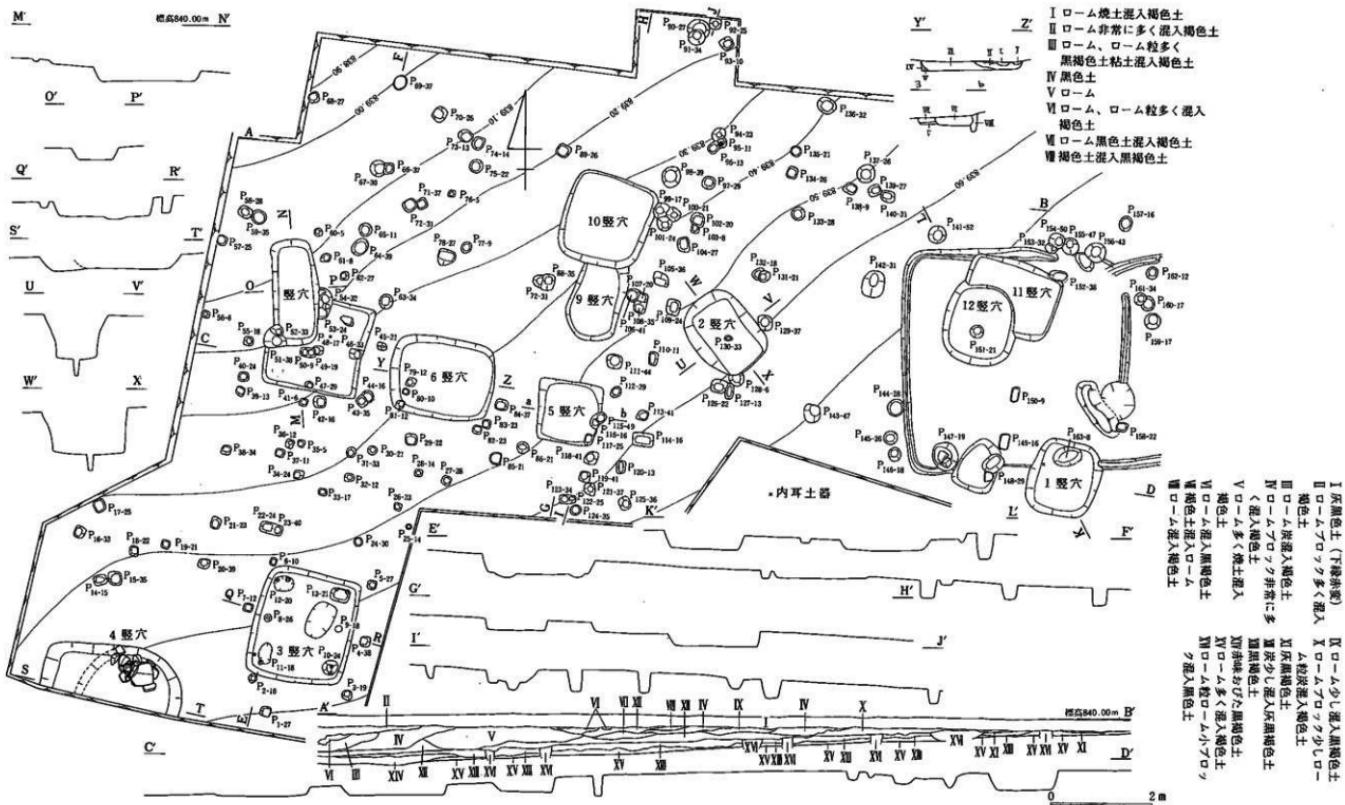
床面は凹凸があり、軟弱であった。また同面上に花崗岩が点在し、これらの石は焼けていた。柱穴は床面上と壁面を取り囲むようにして存在している。これらの柱穴の配列からみて、ほぼ等間隔に柱を建て、割合にしっかりとした建物を建てたことと思う。ちなみに本堅穴に付随するピットとしては、P63、P46、P43、P42、P41、P40、P55があげられると思われる。

遺物は床面上より内耳土器の口縁部破片が出土している。

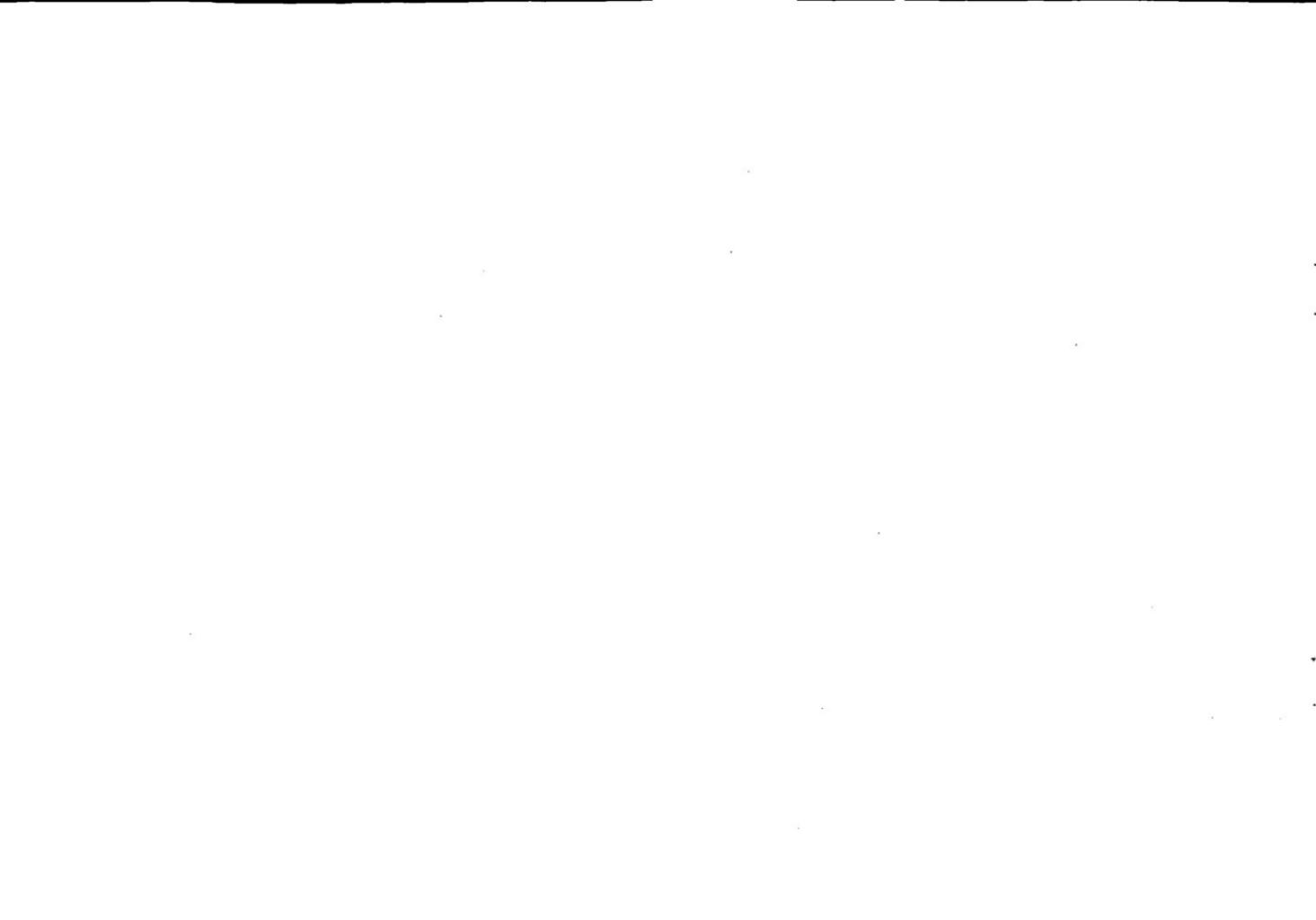
### (8) 第8号堅穴 (第11図、図版7)

本造構は南側で第7号堅穴を切るかっこうで検出された。ローム層を掘り込んだ堅穴で、平面プランは隅丸長方形を呈しており、南北2m13cm、東西95cm、深さ25cm位を計る。壁面は外傾が強く、凹凸は多く、軟弱気味であった。

床面は大般平坦で、軟弱気味であった。柱穴は壁面あるいは壁外面にかなりの数が検出されたが、本造構のものか、後で述べる柱穴群のものかを判別できなかった。遺物の出土は何もなかつた。切り合い関係の点からみて、第7号堅穴との時間差はどのくらいあるかは不明である。



第11図 第1～12号墓穴・柱穴群実測図



## (9) 第9号竪穴 (第11図、図版7)

本遺構は北側で第10号竪穴によって切られている。ローム層を掘り込み構築された竪穴で、隅丸長方形の平面プランを成している。規模は南北は切られているために不明、東西は1m5cm、深さ20cm前後を計る。

黒土を掘り進めてみると、中層から下層にかけて、木炭と焼土が多量に検出された。床面までは、黒色土の覆土である。床面は大般平坦で、軟弱である。柱穴は東、西壁の両方にわたってあるが、本竪穴に関連するかは現段階では不明である。

遺物の出土は何もなかった。

## (10) 第10号竪穴 (第11図、図版7)

本遺構は南東の隅で第9号竪穴を掘り込んで検出した竪穴状遺構である。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は南北1m85cm、東西1m75cm、深さ35cm程を計る。壁は内変気味で、凹凸は少なく、軟弱気味であった。

床面は大般平坦で、軟弱気味を呈し、その状態は普通であった。柱穴が東側に集中しているが、その実態は把握できないので、本遺構に関連するかどうかはよくつかめない。

遺物の出土は何もなく、何んのための遺構かはよくつかめていない。

## (11) 第11号竪穴 (第11図、図版2)

本遺構は第2号住居址の北側の床面を掘り込んで構築した竪穴で、南側は第12号竪穴に切られている。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は南北1m45cm、東西1m90cm、深さ16cm位を計る。壁面は外変気味を呈し、床面はかたく叩かれており、凹凸がわずかに認められる。北東の一隅にピットの存在があるが、竪穴に結びつくかは不明である。

遺物の出土は何もない。ただ、第2号住居址を切っている点、あるいは第2号住居址は平安時代の住居址である点からしてみて、本遺構は中世に属しているものと思われる。

## (12) 第12号竪穴 (第11図、図版2)

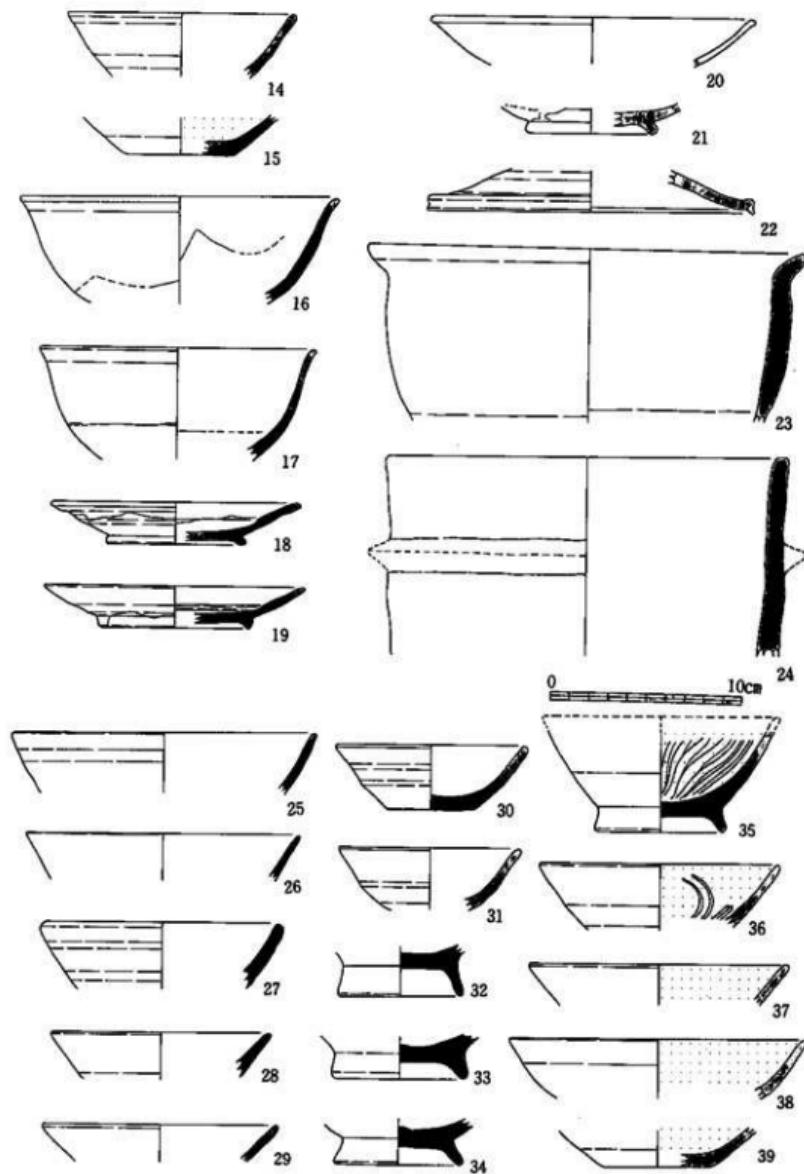
本遺構は北西隅の一角で第11号竪穴を切っている。平面プランは長円形状で、南北1m62cm、東西1m40cm、深さ17~20cm内外を計る。床面はローム層の堅い叩きであって、わずかに凹凸を認める。床面の中央部に円くて、小さなピットが検出されたが、周囲にピットがないために、何の意味の柱穴かは不明である。遺物の出土は何もない。

切り合ひ関係からみて、第11号竪穴よりも新しいことは事実である。

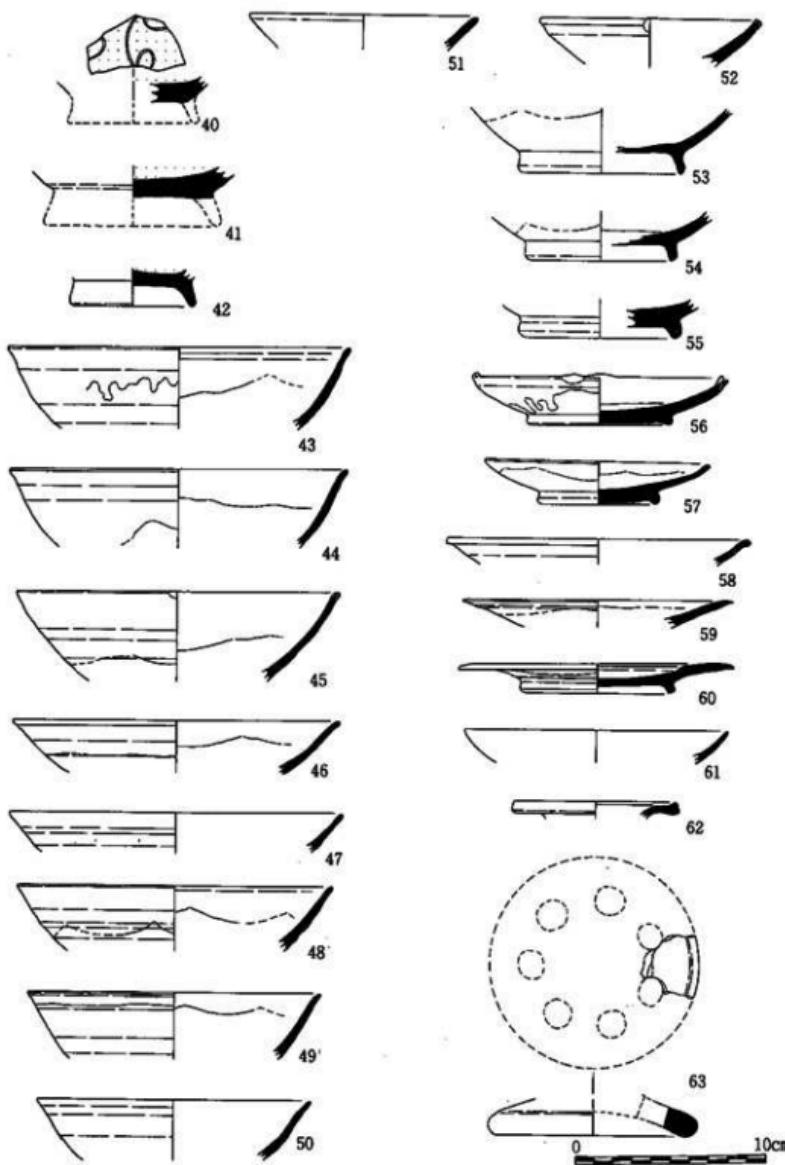
## (13) 柱穴群 (第11図、図版7)

本柱穴群は全部で162ヵ所存在している。これらのなかの形状は角状、椭円形状、円形状の三種類から成り、一つの柱穴群を構成している。柱穴の機能としては竪穴に付随するのと、そうでないものとがある。柱穴群のなかの配列の仕方は良くわからないが、柱穴の範囲の広がりからみて、小グループ的なまとまりがあったものと思われる。

(飯塚政美)



第13図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 2住(14~24), 3住(25~39)



第14図 土器・陶器・灰釉陶器実測図 3住 (40~63)

### 第Ⅲ章 造 物

付いている。内面は全般的に黒色研磨されており、その状態は極めて良好であった。(84, 86, 90, 91, 94, 96, 98, 100, 102) は静止糸切り状を呈していた。

第17図(104～136)は全て第6号住居址から出土した土師器、須恵器である。(104～121)は内黒土器であり、(127～136)は須恵器である。(104～123)は杯、(124～125)は碗、(121～126)は皿である。(105, 115～116, 118～119)は内面に暗文を施してある。(105～106, 108, 118～119)は静止糸切り底を、(109)は回転糸切り底を呈している。(121～122)は静止糸切り底、(122～123)は糸切り底を呈している。

(127～136)は杯であって、少量の雲母を含み、焼成は良好である。(132～136)は回転糸切り底である。

第18図(137～147)は第6号住居址出土遺物であり、(137～141)は須恵器、(142～147)は土師器である。(137～138)は蓋、(139)は突帯文をつけてあり、叩き目が見事に描出されている。(140)は長頸壺の口縁部破片である。

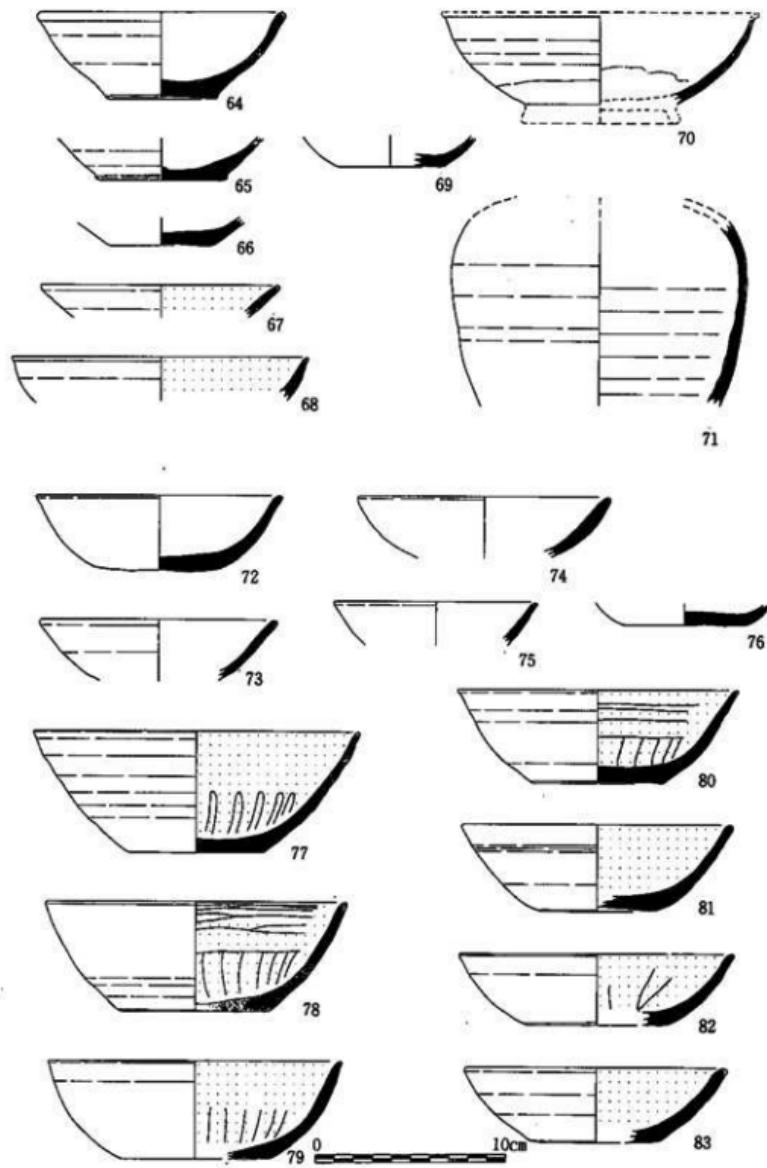
(142～144)は甕型、(145～146)は小型甕を呈し、ハケ目の状態が良好であった。(147)は長胴甕を呈し、内外面ともにヘラケズリが発達している。

第19図(148～155)は第6号住居址出土遺物であり、(148～154)は土師器の甕型土器である。(148, 150～152)は内外面ともにハケ目が施されている。(149)は内、外面ともに軽いロクロのハケ目が横位に規則正しく入っている。(155)は須恵器の大型長頸壺の破片であって、ところどころに自然釉がみられ、外面には叩き目を押捺してある。(154)は木葉底、(149)は回転糸切り底を呈している。

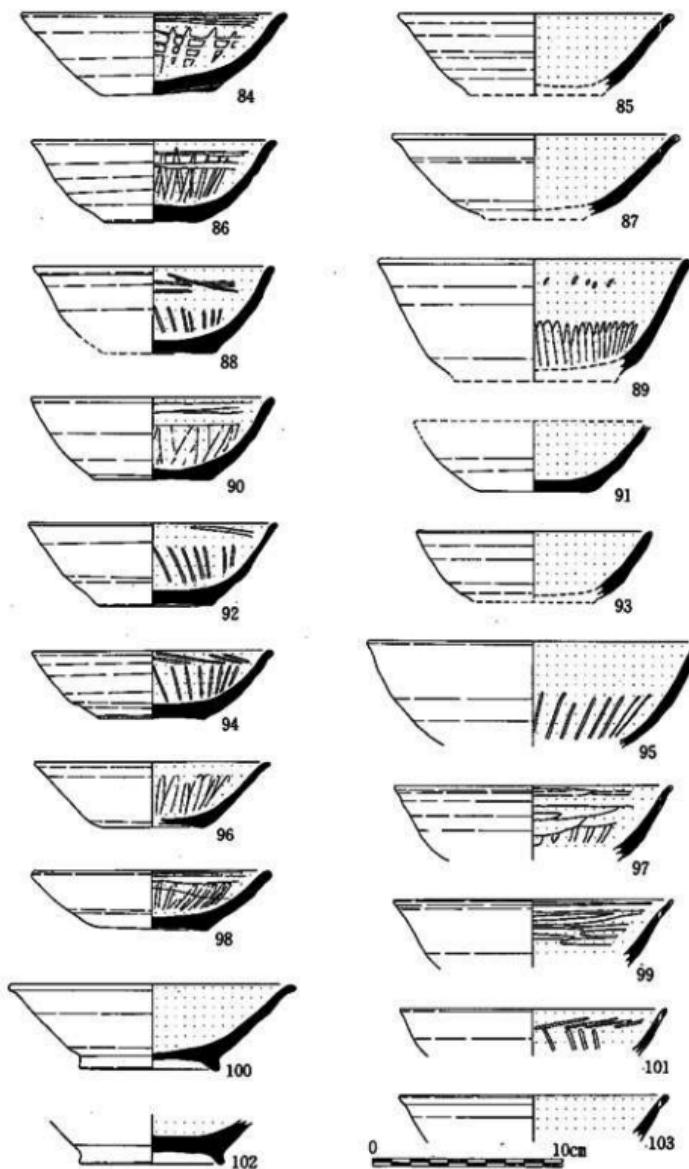
第20図(156～168)は第7号住居址から、(169～183)は第8号住居址よりそれぞれ出土した遺物である。(156～158)は須恵器の杯であり、(158)は回転糸切り底を呈す。(159～161)は灰釉陶器の杯であり、(162)は灰釉陶器の長頸壺口縁部破片と思われる。(163)は土師器小型甕であって、内面のロクロ整形は見事である。(165～168)は土師器甕を呈し、(165～167)は内外面ともにハケ目を施してあり、(166, 168)は軽いナデ目をつけてある。(169～176)は土師器の杯である。全般的に若干雲母を含み、焼成は中位である。(175)は静止糸切り底、(174～176)は回転糸切り底を呈す。(177～183)は土師器内黒の杯であり、ロクロ成型が発達している。(177, 180～181)はミガキが丁寧である。(181)には内面に暗文を施してある。

第21図(184～197)は第8号住居址、(198～204)は第9号住居址出土遺物である。(184～186)は須恵器の杯型を呈し、(186)は回転糸切り底になっている。(187～194)は灰釉陶器の杯であり、特に(190)は底部近くがケズリになっている。(196)は土師器小型甕の破片であり、内・外面ともにハケ目痕が顕著である。(197)は土師器大型甕の口縁部破片であって、外面は斜位ハケ目、内面は横位ナデを呈す。

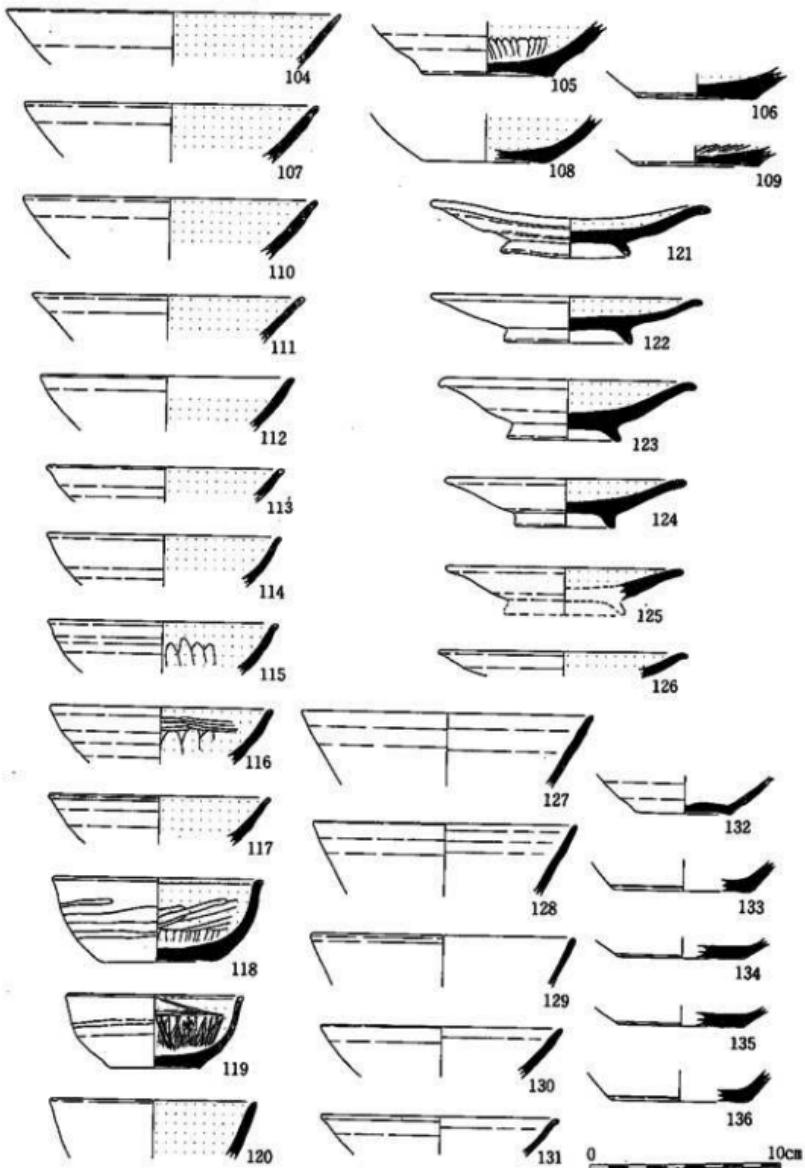
(198)は完型の土師器高台付杯であり、外・内面ともにロクロナデが顕著であり、回転糸切り底を呈す。(199～201)は土師器の杯であり、(199)はロクロ痕、(200～201)はミガキが見られる(200～201)はともに静止糸切り底である。(202)は鋤釜で内外面ともにナデ痕を認める。多量の雲母を含み、焼成は悪い。(203～204)は内黒の杯であり、(204)は糸切り後ナデ調整をしてある。



第15図 土器・須恵・灰釉陶器実測図 5 件 (64~71), 6 件 (72~83)



第16図 土師器実測図 6住 (84~103)



第17図 土器・須恵器実測図 6件 (104~136)

### 第三章 遺物

第22図(205～221)は第10号住居址出土遺物である。(205～210)は土師器内黒杯であり、(207)には暗文を施してある。(211～214)は須恵器杯であり、(213)は回転糸切り底を呈している。(215～216)は須恵器蓋であり、215のつまみは中央部がくぼんでいる。(217～218、220～221)は土師器小型甕、(220)は土師甕を呈す。(217)はロクロ痕、(218)はカキ目が顯著であり、前者は糸切り底を呈す。(219)の外面は横位ナデ、内面は斜位ナデ痕を残す。

第23図(1～2)は内耳土器片である。(1)は第1号竪穴、(2)は第7号竪穴出土である。(1)の外面にはススが付着している。(2)は図上復元ではあるが口縁径は22.8cm位を計る。外面には多量のススが付着し、内・外面ともに横位ナデがみられる。

(3)は第3号竪穴より出土した陶器の破片である。杯型の器型を呈し、ロクロ痕が明瞭である。

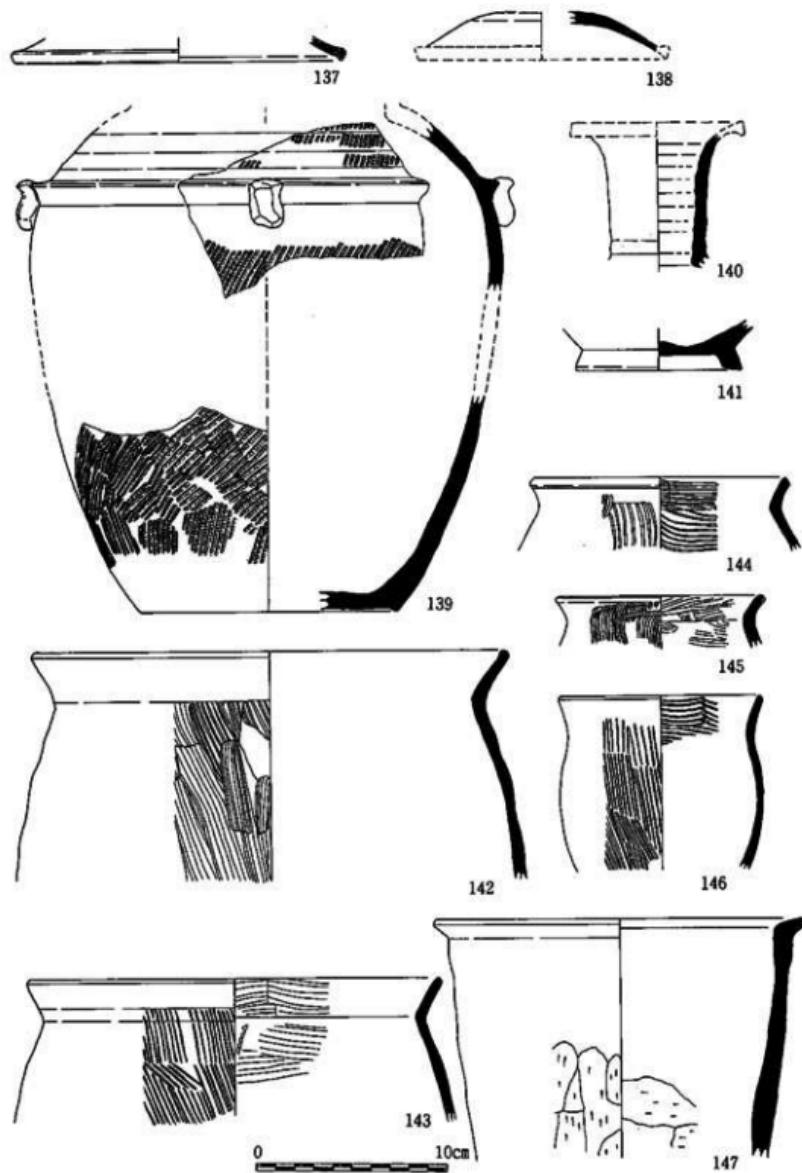
(4～11)は柱穴群より出土した陶器片である。(4)は皿状を呈し、黄味の強い釉が着けられており、黄瀬戸系と思われ、室町中期頃と推測できる。(5)は皿状の器型で(4)とよく類似している。

(6)は灰釉陶器の皿であるが、柱穴群の近くに平安時代の住居址が存在している点からして、それが柱穴群の中へまぎれこんだものであろう。

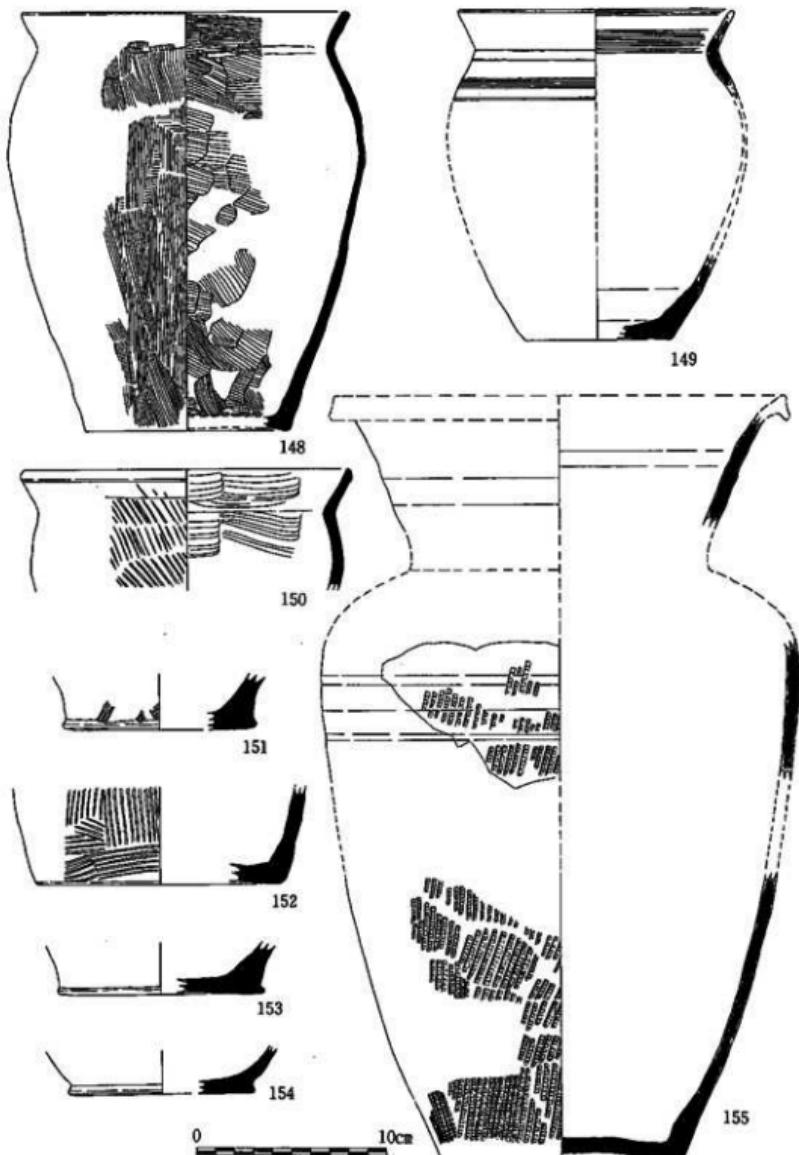
(7)は無釉の陶器片であり、感じとして中世前半期に位置づけが可能であろう。(8～9)は茶碗の底部破片であろう。(8)は黄味がった釉、(9)は赤みがった釉が施されており、(8)は室町中期、(9)は室町後期から戦国時代に位置づけられると思われる。

(10～11)は鉢状の器型を呈すると思われ、図上復元ではあるが(10)は口縁径25.4cm、(11)は35.9cmを測る。両片とも鉄釉を有しているが、そのうちでも(9)は茶色味が強く、(10)は若干赤味をさしていた。室町後半から戦国期に位置づけが妥当と思われる。

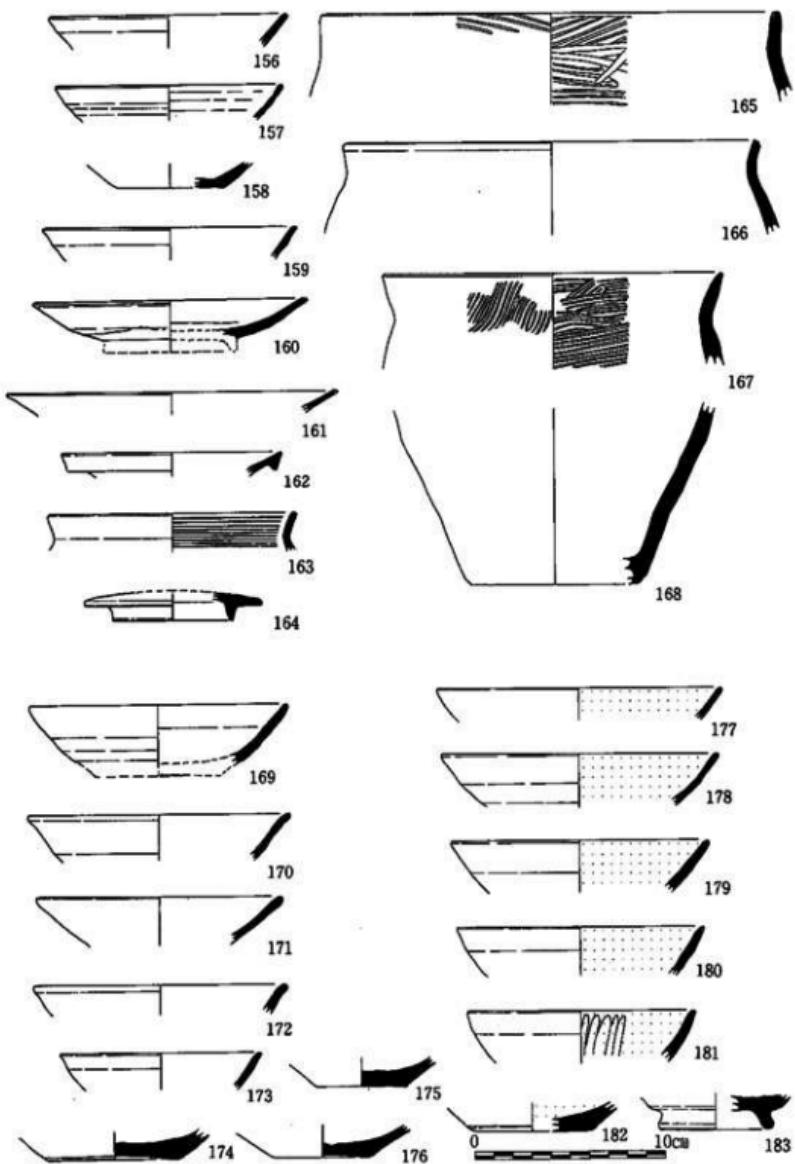
(飯塚政美)



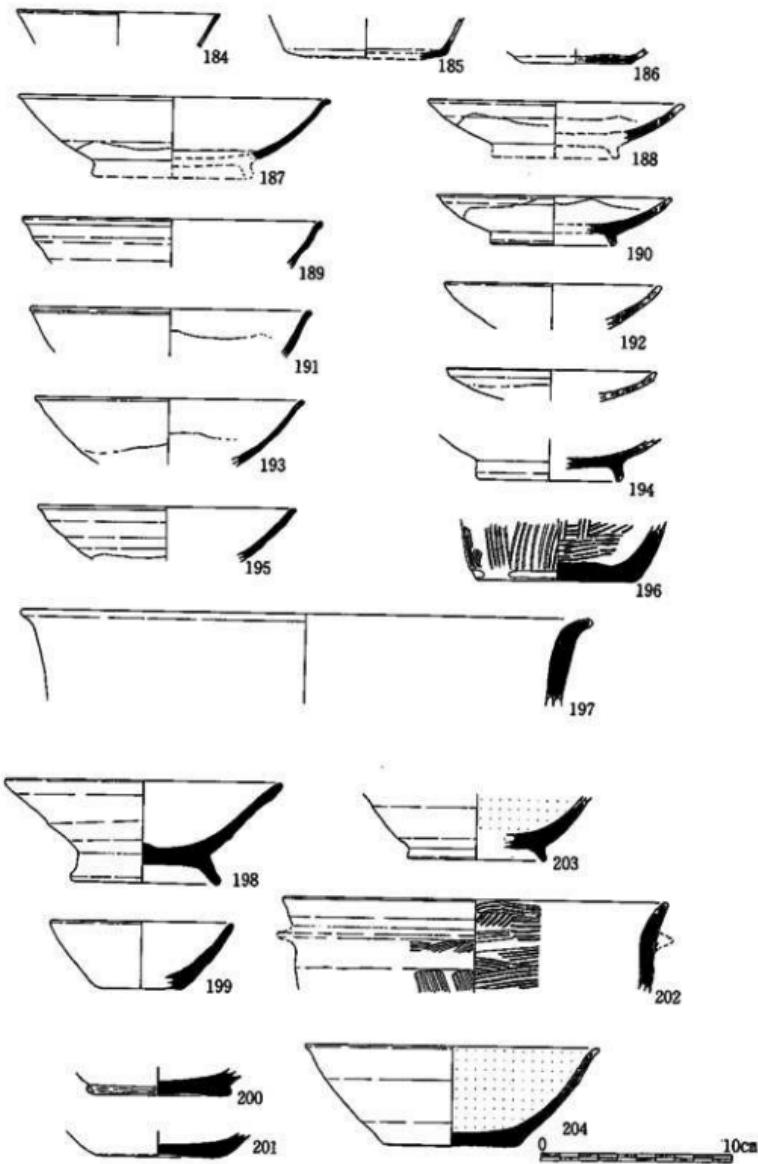
第18図 土器・須恵器実測図 6枚 (137~147)



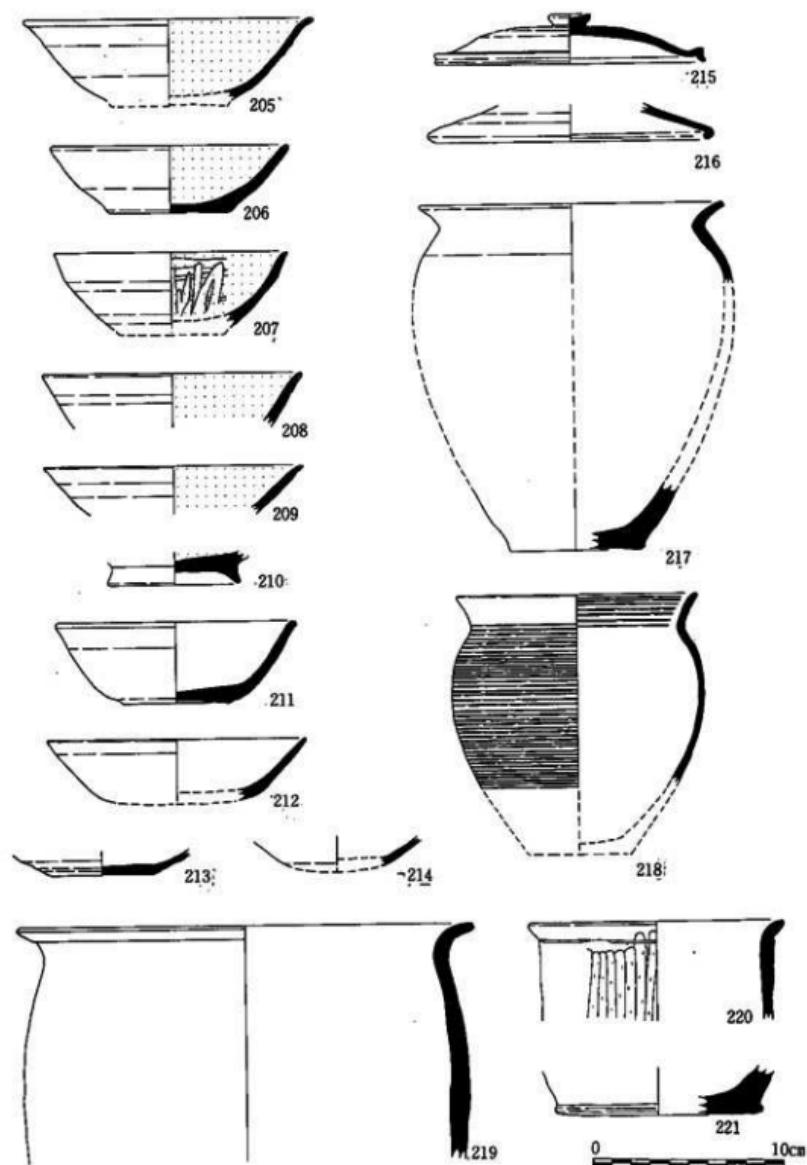
第19図 土師・須恵器実測図 6件 (148~155)



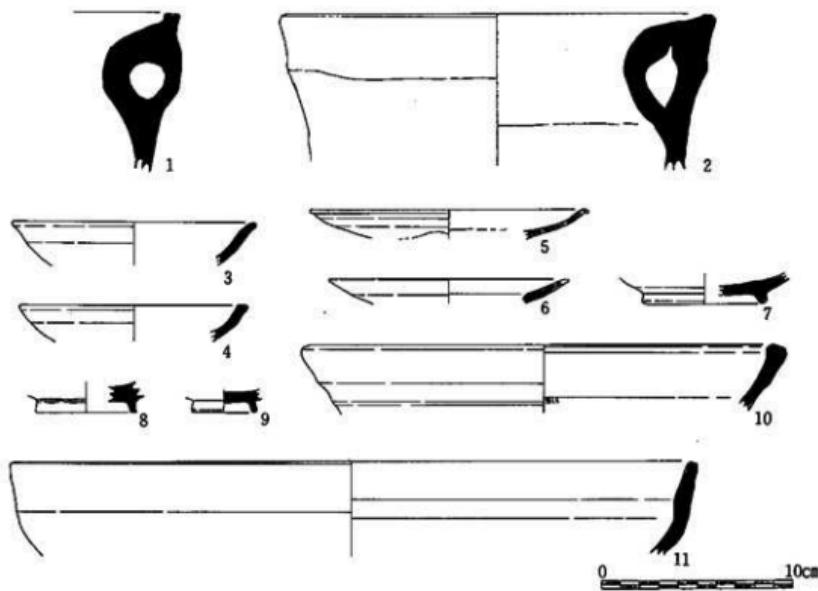
第20圖 土器・須恵・灰釉陶器実測図 7枚 (156~168), 8枚 (169~183)



第21図 土器・須恵・灰釉陶器実測図 8件 (184~197), 9件 (198~204)



第22図 土器・須恵器実測図 10件 (205~221)



第23図 内耳土器・陶器実測図 10住 (205~221)

## 第2節 石 器 (第24図)

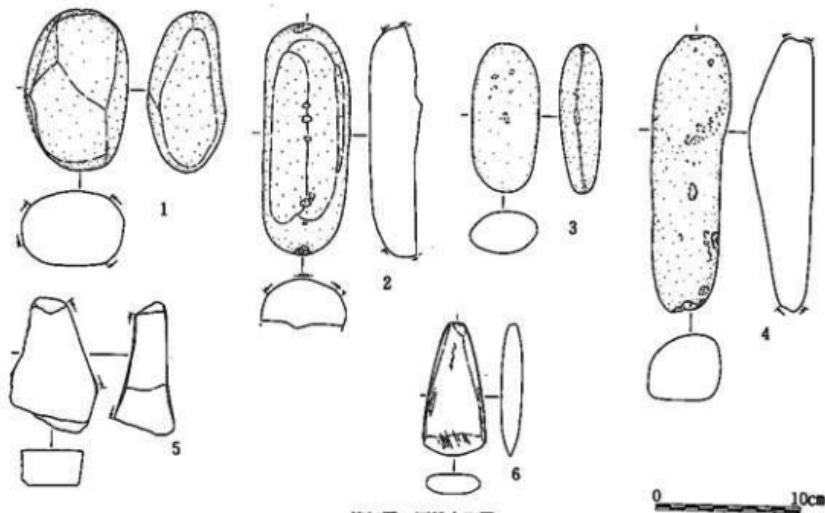
第24図(1~3)は第3号住居址の床面上から出土した敲石の一種かと思われる。その理由として軽いたたきが石の周縁にみられることである。(1~2)は石の短軸方向の周縁部に、(3)は長軸方向の周縁に縦長にタタキ痕を認める。石材は(1~3)は全て硬砂岩である。三峰川まで拾いに行つたのであろう。

(4)は第6号住居址のピット内から出土した敲石状の石器であり、その敲き個所は長軸方向の両先端部に限られている。石材は緑泥片岩である。これも三峰川に産していて、この新山の地には全く産しないといつても過言ではない。

(5)は第10号住居址の床面上より出土した砥石であって、その使用面は片面だけに限られており。砥石面は長軸の方を利用している。石は油性の強いのを用いている。

(6)は第3号住居址より出土した定角式磨製石斧であり、刃部の角度は極めて鋭角になつてゐる、破損個所はどこもなく丁寧に磨いて作り上げてあった。本来、この石器は縄文時代に多いのであるが、平安時代の住居址から出土することはまれである。ちなみに本遺跡からは縄文時代の土器片は一片も出土していない。

(飯塚政美)



第24図 石器実測図

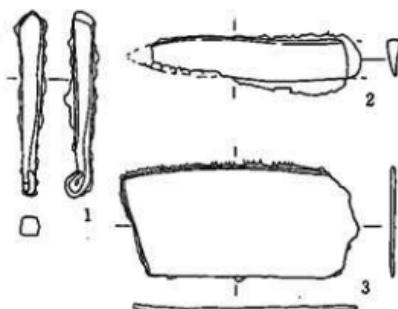
## 第3節 鉄製品（第25図）

第25図(1)は第3号住居址より出土したピンセット状工具であり、先端部はワラビ手状に折りまがっている。断面は方形状を呈す。

(2)は第2号住居址の床面上に密着して出土した刀子であろう。刀子としては脇部が幅広ろの感がある。鋒者と刃部の先端部が欠損している。

(3)は第6号住居址より出土した鉄製品である。鉄板状の形態を成しており、何に使用したかは不明であるが、床面上に密着して出土しているので、本住居址に付随する遺物であることにはまちがいない。

（飯塚政美）



第25図 鉄製品実測図（1：2）

## 第Ⅳ章 まとめ

本遺跡地は伊那市富県新山四方部落の東端、北側に芝王川が南流し、東から北へわずかに傾斜している山麓扇状地の突端面に位置し、昔から表面採集でかなりの量の遺物が拾えるとのことで新山地区ではかなり知れわたった遺跡の一つであった。

今までの表面採集では奈良・平安時代・中世の遺物が主であった。今回の調査では、奈良時代の住居址4軒、平安時代の住居址6軒、中世の竪穴12基、広い範囲で展開する柱穴群を、またそれらに伴出する土器類、石器類、鉄製類、陶器類が検出された。

調査の結果からみた、各遺構の主なる特長を記す。その項目は平面プランと規模に限る。第1号住居址一隅丸方形、南北4m25cm、東西不明。第2号住居址一隅丸方形、南北4m40cm、東西4m50cm。第3号住居址一隅丸方形、南北不明、東西6m。第4号住居址一隅丸方形、南北不明、東西4m35cm。第5号住居址一隅丸方形、南北不明、東西5m10cm。第6号住居址一隅丸方形、南北5m40cm、東西6m40cm。第7号住居址一隅丸方形、南北不明、東西不明。第8号住居址一隅丸方形、南北不明、東西不明。第9号住居址一不明、南北不明、東西不明。第10号住居址一隅丸方形、南北4m75cm、東西5m。

次に竪穴について触れてみよう。その項目については前の住居址の項目と同様である。第1号竪穴一隅丸方形、南北1m50cm、東西1m40cm。第2号竪穴一隅丸長円形状、南北1m73cm、東西1m28cm。第3号竪穴一隅丸方形、南北2m28cm、東西2m。第4号竪穴一隅丸方形、南北不明、東西不明。第5号竪穴一隅丸方形、南北1m25cm、東西1m25cm。第6号竪穴一隅丸長方形、南北1m62cm、東西2m10cm。第7号竪穴一隅丸方形、南北1m88cm、東西1m95cm。第8号竪穴一隅丸長方形、南北2m13cm、東西95cm。第9号竪穴一隅丸長方形、南北不明、東西1m5cm。第10号竪穴一隅丸方形、南北1m85cm、東西1m75cm。第11号竪穴一隅丸方形、南北1m45cm、東西1m90cm。第12号竪穴一長円形状、南北1m62cm、東西1m40cm。

次に遺物について触れてみよう。土師器、須恵器、灰釉陶器が多くあった。器型としては杯、皿、碗、甕等が多く、ごく一般的な傾向とみられた。これらは東山道の脇道を利用して新山の谷へ入ってきたのであろう。

中世陶器は前述したように近くには、あのような美事な地蔵菩薩坐像があるにもかかわらず、陶器片の出土は少量であり、しかも青、白磁のような舶来品は一点も発見されなかった。土師器は真間や園分期の古い方に該当すると思われる。第6号住居址は出土遺物の量及び器型、さらに内黒土器等々からみて、本住居址群中、集落の中心となる住居址と思われる。

芝王遺跡は奈良時代以前の遺物は何一つとして出土していない。このことから考えてみると、奈良時代以前は全く生活立地としての対象にはなっていなかった。しかし、農耕生活がかなり定着し、耕地拡大の必要性が生じるようになった奈良時代に入ってようやく人々が居住はじめたのである。居住の目時は、豊かな湧水と、湿地帯で生活活動の場として適しており、一方、芝王川によって形成された小河岸段丘面が、住居地区として選ばれたものと考えられるのである。

(飯塚政美)

# 図 版



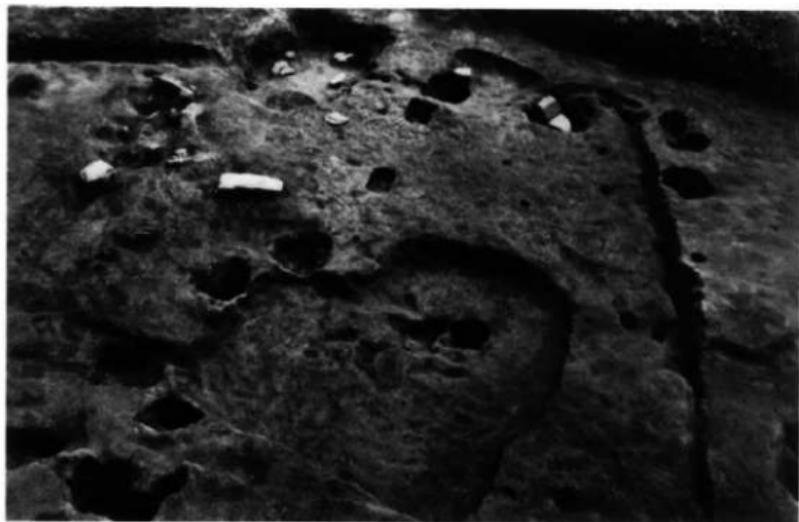
遺跡地を南側より眺む



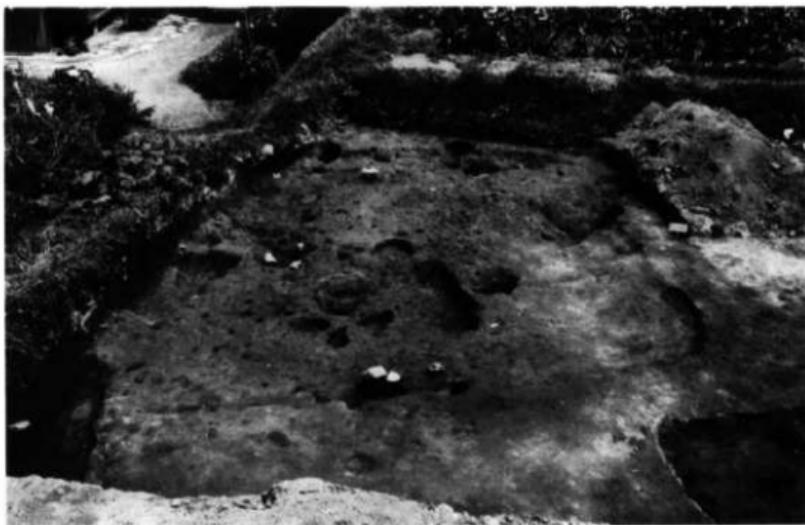
土地改良終了後の遺跡地



第1·2号住居址



第2号住居址。第1·11—12号竖穴



第3号住居址



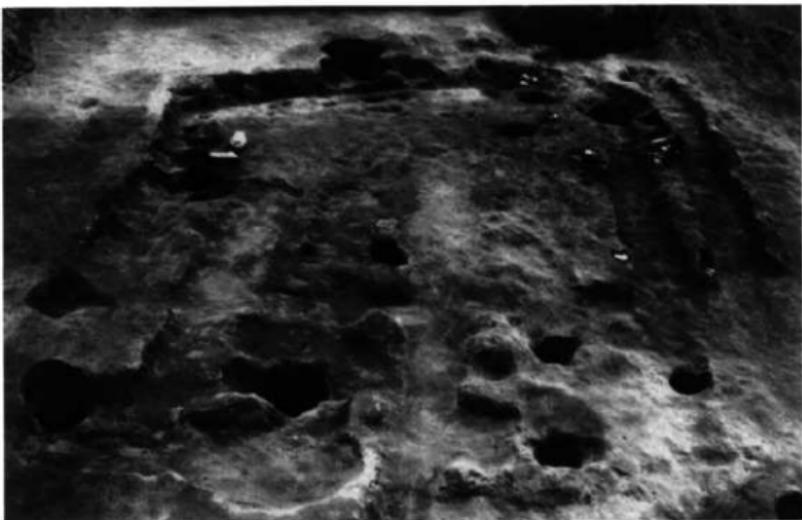
第4·5号住居址



第6号住居址



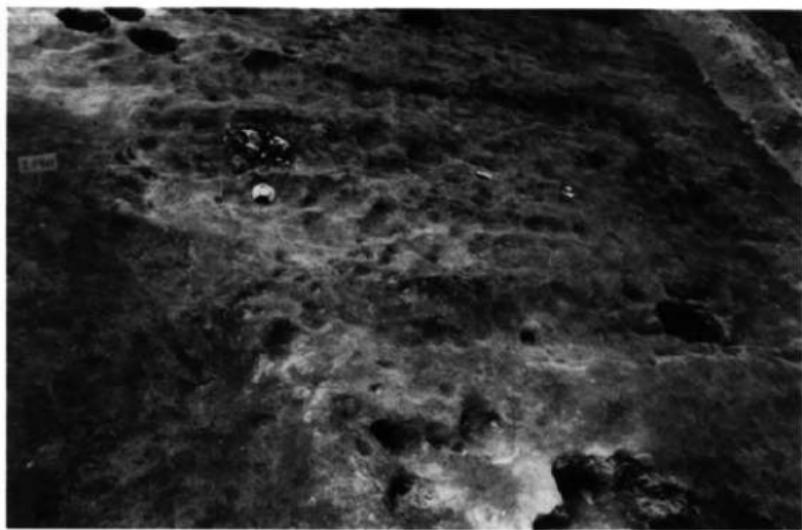
第7・8・9号住居址配置



第 7 號住居址



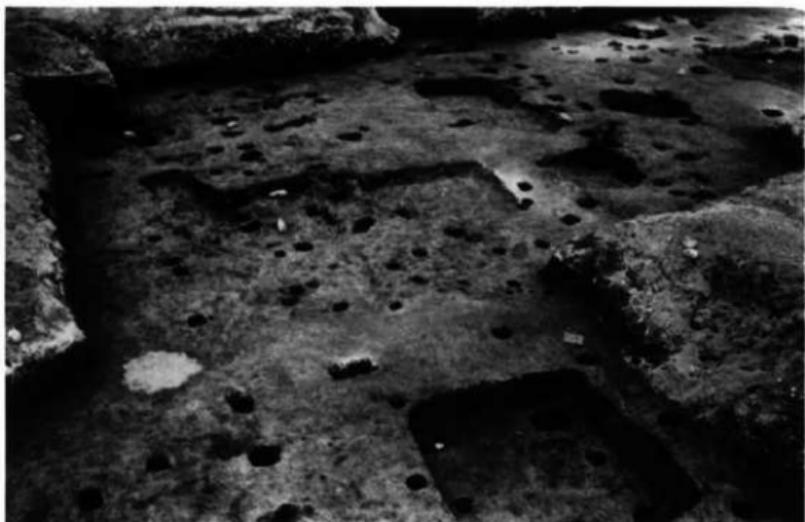
第 8 號住居址



第9号住居址



第10号住居址



柱穴群と整穴



第3・4整穴

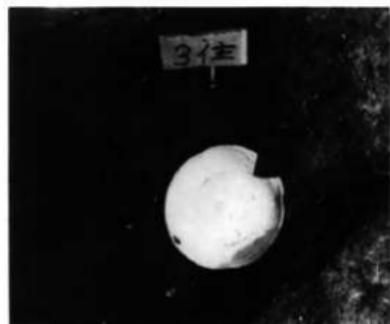
图版 8 遗物出土状况



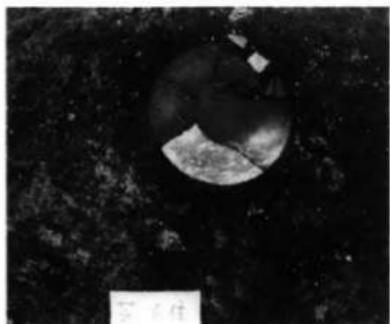
石器出土状况



土器出土状况



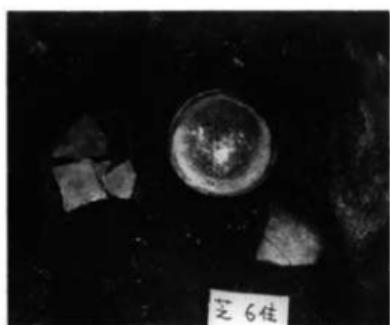
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



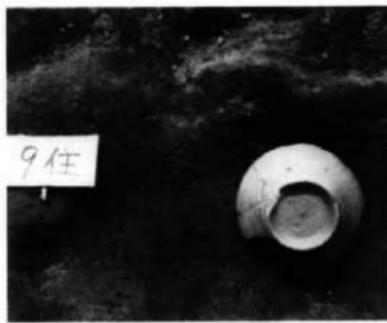
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



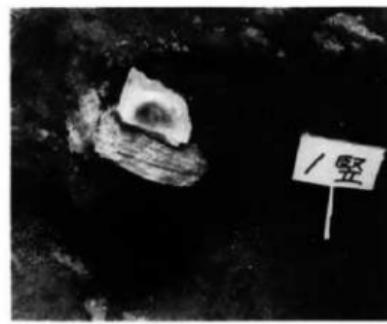
土器出土狀況



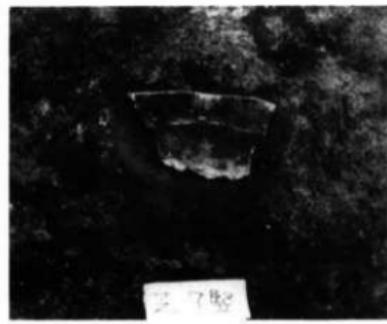
土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



①第1号住居址土師器 ②～④第3号住居址灰釉陶器  
⑤～⑩第6号住居址土師器



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



⑯



⑰



⑱



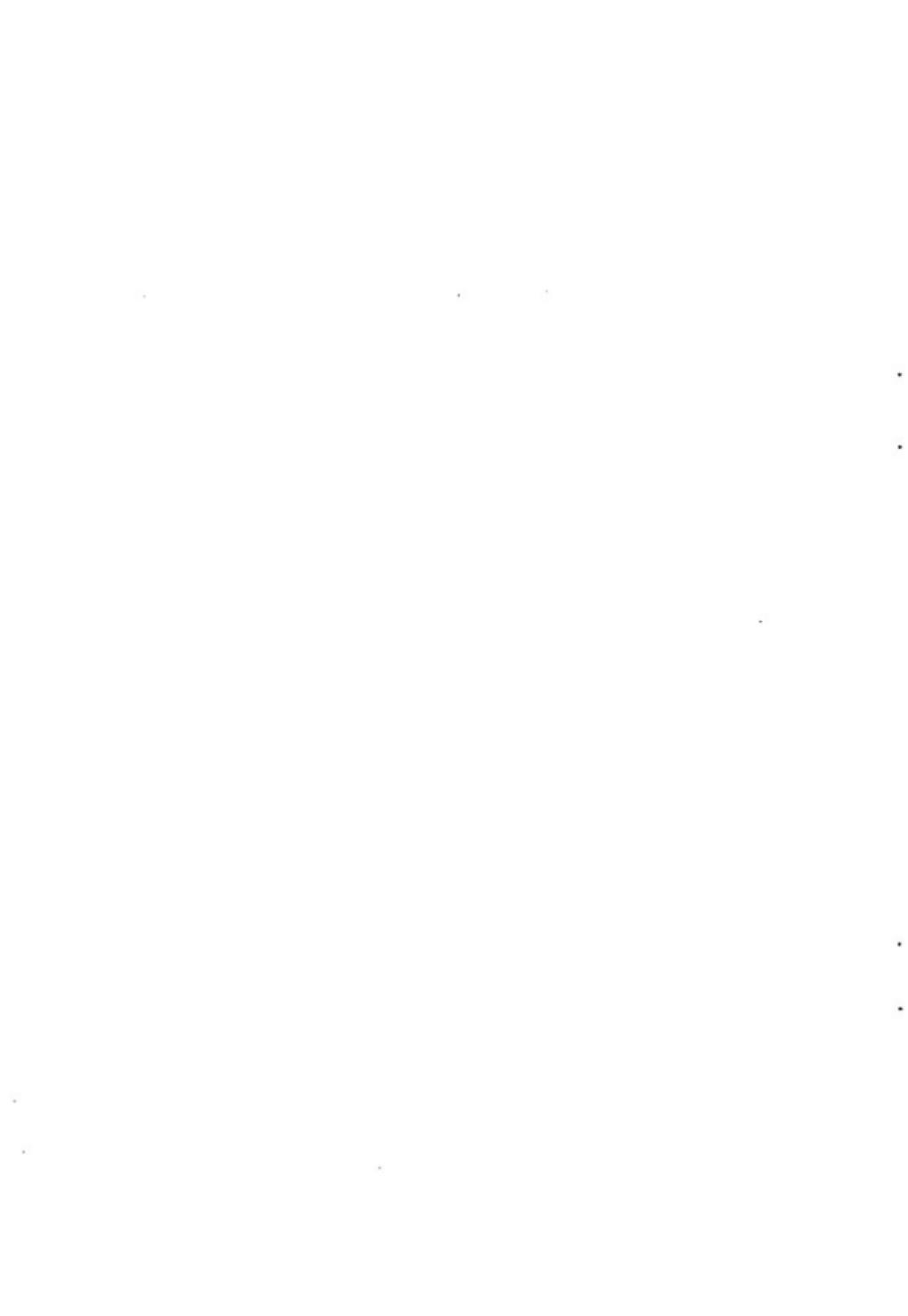
⑲



⑳

⑪~⑯第 6 号住居址土師器 ⑰第 9 号住居址出土土師器  
⑲第 10 号住居址須惠器

# 芝王 B 遺跡



## 目 次

目 次.....	(3)
挿図目次.....	(4)
図版目次.....	(4)
第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	(5)
第1節 発掘調査の経緯.....	(5)
第2節 調査の組織.....	(5)
第3節 発掘日誌.....	(6)
第Ⅱ章 造 構.....	(8)
第1節 古 代.....	(8)
(1) 第11号住居址.....	(8)
(2) 第12号住居址.....	(8)
(3) 第13号住居址.....	(10)
(4) 第14号住居址.....	(10)
(5) 第15号住居址.....	(10)
(6) 第16号住居址.....	(12)
第Ⅲ章 造 物.....	(13)
第1節 土 器.....	(13)
第2節 石 器.....	(20)
第3節 鉄製品.....	(20)
第Ⅳ章 ま と め.....	(21)

## 挿 図 目 次

第1図 第11・12号住居址実測図	(9)
第2図 第11号住居址カマド実測図	(10)
第3図 第13~16号住居址実測図	(11)
第4図 第16号住居址カマド実測図	(12)
第5図 土師器実測図 11住(旧) (1~2), 11住(新) (3~26)	(14)
第6図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 11住新 (27~38), 12住 (39~42)	(15)
第7図 土師・灰釉陶器実測図 12住 (43~48), 13住 (49~59)	(16)
第8図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 13住 (60~68), 14住 (69~90)	(17)
第9図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 14住 (91~99), 15住 (100~107)	(18)
第10図 土師・須恵・灰釉陶器実測図 16住 (108~131)	(19)
第11図 石器実測図	(20)
第12図 鉄製品実測図	(20)

## 図 版 目 次

図版1 遺構
図版2 遺構
図版3 遺物出土状況
図版4 出土遺物
図版5 出土遺物

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

富県地区の県営圃場整備事業は昭和48年度、桜井地区に於いて最初に着手され、昭和49年度には貝沼地区で実施されました。幸いにも両地区には指定された遺跡は存在しなかった。昭和51年度の事業地区には上原遺跡、小御堂遺跡、根木谷中畑遺跡が該当したために、工事着手以前に調査にかかる運びとなつた。

前述の遺跡発掘調査地区は水田地帯であったが、夏場施行であったために収穫等の問題で支障がなく、調査は割合に順調に実施された。発掘調査実施時期は上原遺跡では7月下旬、根木谷中畑遺跡は8月上旬～中旬、小御堂遺跡は9月上旬に行われました。この三遺跡について文化庁の補助金を受けた。

その後、県営圃場整備事業は毎年小規模ながら実施され、新山地区は昭和56年度に初めて着手されました。昭和57年度土地改良事業地区内に舟ヶ洞遺跡が該当したが、金額が少なかったので文化庁の補助金は受けなかつた。

昭和58年度には芝王B遺跡が含まれ、文化庁より補助金交付の内定があつたので、市教育委員会を中心にして芝王B遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。文化庁の補助金額は1,100,000円である。

### 第2節 調査の組織

#### 芝王B遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委 員 長	伊澤 一雄	伊那市教育委員会教育長
副 委 員 長	福澤 純一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	赤羽 映土	伊那市教育委員長
調査事務局	三澤 昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	竹松 英夫	〃 社会教育課長
〃	柘植 晃	〃 課長補佐
〃	武田 則昭	〃 係長
〃	高木いづみ	〃 主事

##### 発掘調査団

団 長	友野 良一	日本考古学协会会员
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会員

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

調査員	御子柴泰正	長野県考古学会会員
ク	福沢 幸一	ク
ク	飯塚 政美	日本考古学協会会員
ク	小池 孝	ク

### 第3節 発掘日誌

昭和58年8月30日 晴 第10号住居址の北側に住居址を発見し、これを第11号住居址とし、プラン確認のために拡張をする。拡張が完了してみると二軒の住居址があると思われ、東側を第11号住居址、西側を第12号住居址とし、掘り下げを開始する。

昭和58年8月31日 晴 第11号住居址の掘り下げを実施していく。第12号住居址の掘り下げを終了する。これによると、第11号住居址は第12号住居址を西側で切っている。南北、東西に残したペルトの実測をし、それをとりはずす。

昭和58年9月1日 雨時々曇 雨であったので作業を中止し、発掘器材及び道具の中間整備を調査員にて行う。

昭和58年9月2日 雨時々曇 雨であったので作業を中止し、現場のテント内で調査員によって道具の中間整備をする。

昭和58年9月3日 晴 第11号住居址、第12号住居址の北側に落ち込みがみられ、掘り下げていくと四軒の住居址が発見され、これを第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址とする。

昭和58年9月5日 晴 第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址を掘りはじめる。4軒の住居址は複雑な切り合い関係にあった。

昭和58年9月6日 晴 第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址の掘り下げを進める。

昭和58年9月7日 晴 第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址の掘り下げを終了する。

昭和58年9月8日 晴 第11号住居址、第12号住居址、第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址を清掃し、写真撮影を終える。

昭和58年9月9日 晴 第11



住居址の発掘

### 第3節 発掘日誌

号住居址、第12号住居址の実測及びカマドのカッティングと実測を行った。

昭和58年9月10日 晴 第13号住居址、第14号住居址の実測及びカマドのカッティングと実測を行う。

昭和58年9月12日 雨 雨のために現場の作業を中止し、調査員によって図面整理を行う。

昭和58年9月13日 晴 第15号住居址、第16号住居址の実測及びカマドのカッティングと実測を行う。

昭和59年1月～2月 図面の整理・原稿執筆、報告書の編集。

昭和59年3月 報告書を刊行する。

(飯塚政美)

#### 作業員名簿

酒井岩夫、登内歎光、池上大二、三沢 寛、大野田英、建石紀美子、大野田三千代、網野実子、後藤重美、大久保富美子、伊藤 勝、唐木由人、小松善恵、元林久太郎、埋橋程三、吉田虎子、春日通道、中原純二、唐木 稔  
(敬称略順不同)

## 第Ⅱ章 遺 構

## 第1節 古 代

## (1) 第11号住居址 (第1図、図版1)

本址は発掘調査地区の北側一帯に位置して発見された。近接している遺構としては北側に第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址がある。

耕作土は約30cm位あり、その下のローム層を掘り込んで構築した隅丸方形状の竪穴住居址であり、西側は周溝によって第12号住居址を切っている。西側の床面上は後世の桑のうねによって擾乱され、その様子は溝状に南北に残っていた。規模は南北5m40cm、東西5m55cm位を計る。

壁高は20~40cm位を計り、やや外傾気味で、凹凸が多く、かたくなっている。床面は堅いローム層の叩きで、凹凸はわずかにあり、場所によっては砂混じりのタタキもあった。北壁直下の西側から西壁、南壁を経て、東壁南半分に深さ5cm、幅20cm位の周溝が回っている。中央より若干南側によったところに南から東半分にかけて周溝が回っており、第11号住居址内に於いても時期的な差異が実証できる。床面上のところどころに貼り床がみられ、場所によっては2枚貼り床のところもある。

柱穴は床面上のと、壁に沿って存在しているのと、二種類に大別されている。カマドは東壁中央部付近にあり、石組粘土カマドと思われるが、大部分は破壊されたとみて、石は散乱していた。カマドに使用した石は変成岩が多く、赤々と焼けており、また、カマドの焚口付近から床面にかけて、多くの焼石が存在していた。遺物は土師器、須恵器の出土がみられ、カマドの北側には内黒土器が集中して出土した。よって本址は奈良時代に属していると思われる。本住居址の新しいのからは灰釉陶器の出土がみられた。

## (2) 第12号住居址 (第1図、図版1)

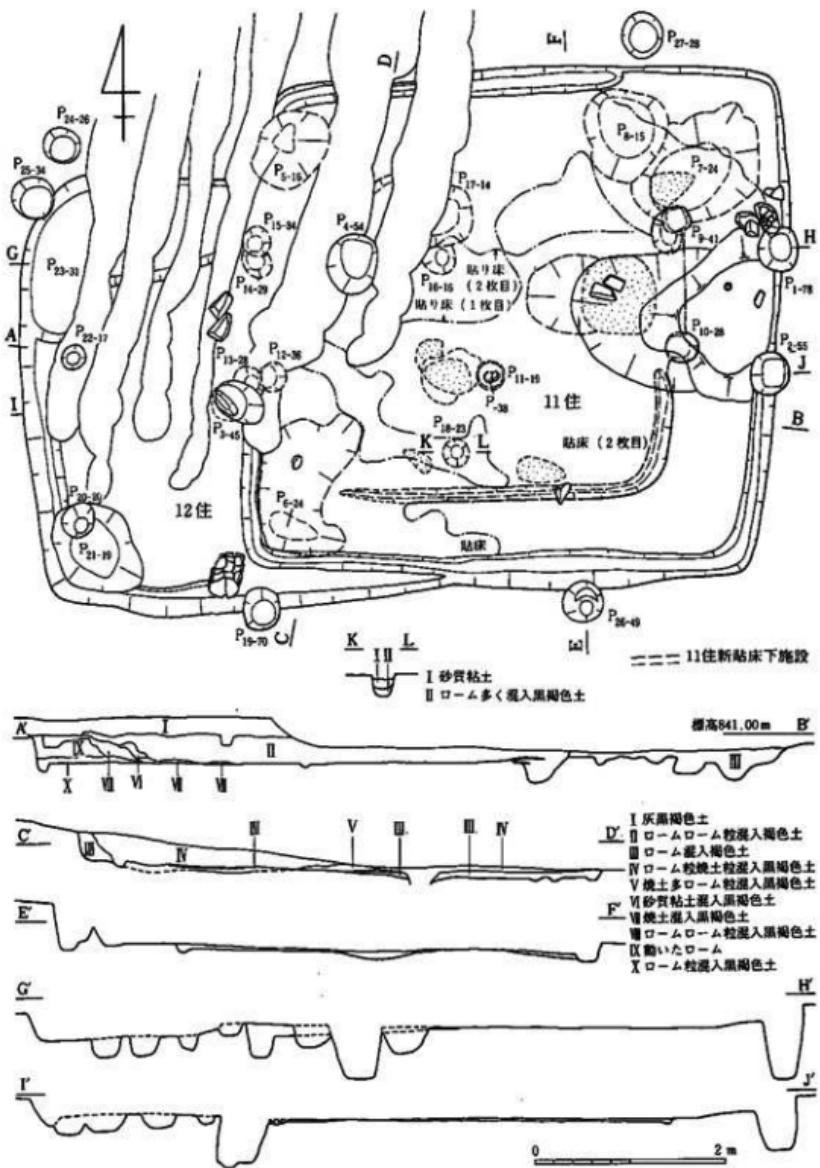
本址は東側で第11号住居址に切られたかっこで発見され、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址であり、その規模は南北4m75cm、東西不明である。そのプランはその全貌はわからないが、類推するに隅丸方形状プランを呈する。

壁高は10~40cm位を計り、外傾気味で凹凸が比較的少なく、かたかった。床面はローム層のかたいたタタキであり、凹凸は多かった。南北に長くうねの跡があり、床面を破壊していた。

東壁には大きな花崗岩が二個存しているが、おそらくこれがカマドの石芯に使用した石であったと思われる。構築時は前述した石から察して相当良好なカマドであつただろうが、大部分は第11号住居址の構築時に破壊されたのであろう。

柱穴は大部分壁面あるいは壁面近くに存しているが、擾乱以前には床面上に存在していたものと思う。床面の南側から西側にかけて壁面直下に幅15cm、深さ5cmの周溝が回っている。

南壁に密着して出土した土師器は長胴甕の形態を成し、ほぼ同一個体であった。土師器、須恵器



### 第1回 第11・12号住居址実測図

## 第Ⅱ章 遺 構

灰釉陶器が相当量出土し、よって平安時代の住居址と思われる。

### (3) 第13号住居址（第3図、図版1）

本址は発掘調査を実施した遺構のなかで、最北端部に位置して発見された住居址群中の一つである。本址を第14号住居址が切っている。北側は土地改良用地外の為に発掘調査は不可能であった。

表土面から30cm位下ったローム層面を掘り込んだ竪穴住居址で、隅丸長方形プランを呈するものであろうと思われる。規模は推定するに、東西6m位、南北は不明であった。

壁高は南壁は高くて50cm位を計り、凹凸が多く、かたくなっていた。床面は後世の耕作時によるうねのために大部分は破壊されたとみて、凹凸が顕著であり、ところどころにかたい部分を認めのみであった。

柱穴は切り合い関係が複雑であったことや、後世の搅乱のためにどのピットが本址と関連するのかは不明であった。カマドは東壁の中央部付近に存在し、構築時は石組粘土カマドであったと想定できるが、後世の搅乱によって大部分破壊されてしまったとみて、わずかに焼土や粘土のかたまりが確認できたのみであった。

遺物は土師器、須恵器が出土しており、よって奈良時代の住居址と思われる。

### (4) 第14号住居址（第3図、図版1）

本址は第13号住居址を切って構築してあり、南西の一隅は本住居址を貼り床して第15号住居址にしてある。北壁は用地外の為に発掘調査は不可能であった。

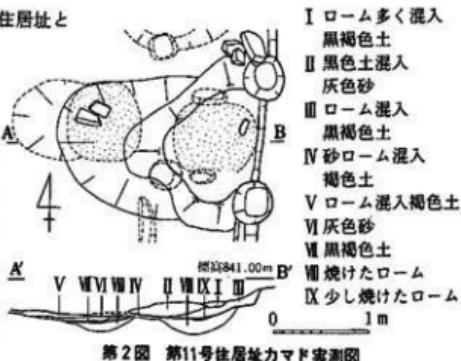
プランは推定隅丸方形を呈し、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址であって、その規模は南北は不明。東西は4m~30cm位を計る。壁高は30~40cm位を計り、その状態は堅く凹凸が多くあった。床面は堅いローム層の印きで、凹凸が各所に認められた。また、同面上には切り合い関係が複雑化していたために、ところどころにロームブロック状のかたいところが認められた。

柱穴の存在は各所にあり、どのピットが本址と関連するかは何んら不明である。カマドは東壁の中央部にあり、当初は石組粘土カマドであったと思われるが、後で破壊されたとみて、発掘調査段階ではその残存状態はやや不良であった。カマドの芯に用いたのは花崗岩であって、焼けて赤く変色していた。

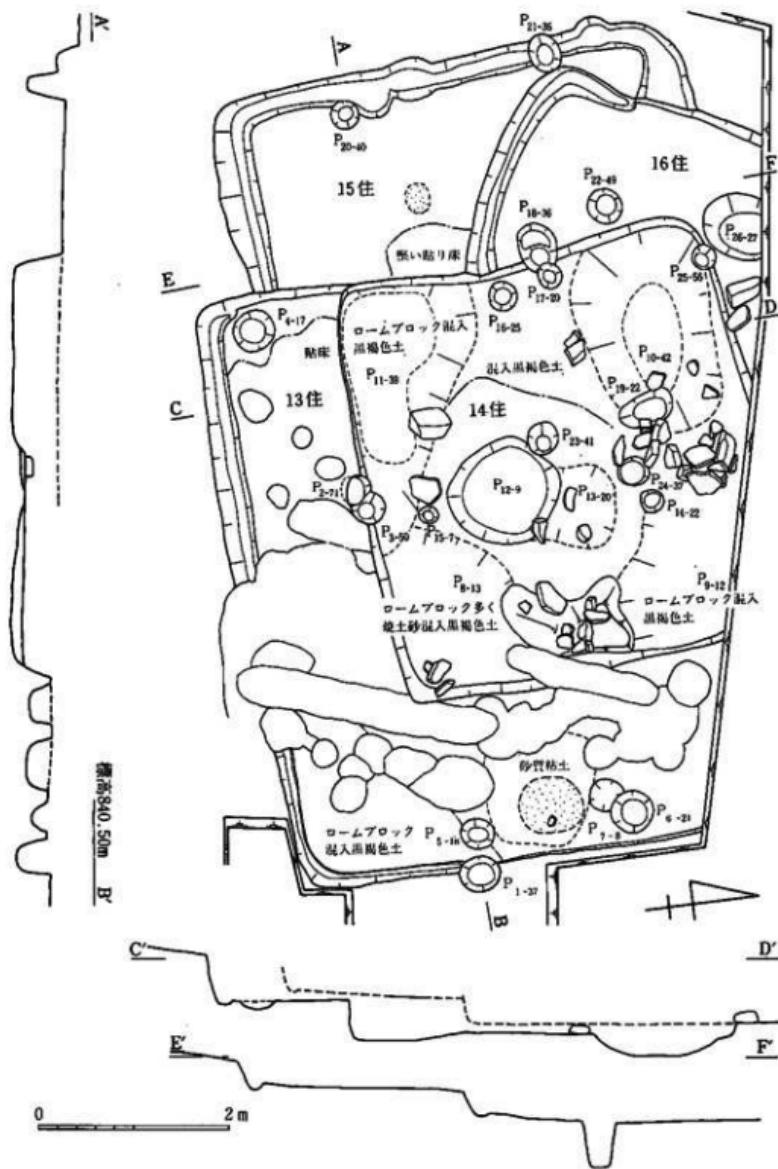
遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、よって平安時代の住居址と思われる。

### (5) 第15号住居址（第3図、図版1）

本址は南東的一部分は第14号住居址の上に貼り床し、北壁は第16号住居址に切られている。ローム層を掘り込んだ竪穴住居址で、プランの全貌は不明であるが、想定するに隅丸方形と思われる。その規模は南北5m、東西は不明である。



第2図 第11号住居址カマド実測図



第3図 第13～16号住居址実測図

壁高は15cm～35cm位を計り、外傾気味で凹凸が多くなっている。床面は軟弱で、凹凸が多くなっているが、ところどころにかたい所があり、また部分的に貼り床の所も認められた。

本址の残存している壁面直下には周溝が回わっていた。

柱穴はP20, P21の二本が検出され、ともに主柱穴になりそうであった。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、よって本址は平安時代の住居址と思われる。

#### (6) 第16号住居址（第3図、図版1）

本址は南壁で第15号住居址を切り、南東の一部は第14号住居址に貼り床をしている。ローム層を掘り込んだ竪穴の住居址で、隅丸方形状の平面プランを呈している。

北壁は用地外のために発掘調査は不可能であった。

現存している南壁や北壁の高さは20～30cm位あり、その状態は外傾気味で、凹凸が多くなっている。床面は大般水平で、軟弱であった。南壁直下に周溝が回わっていた。カマドは東壁中央部付近にあり、石組粘土カマドであり、カマドの残存状態は良好であった。両袖石は花崗岩を直立させて組み、これらの石の上に平石を架した状態で組んである。周辺にはカマドに使用したと思われる焼土や焼石が散乱していた。

柱穴は各所に検出されたが、本住居址に密接するかどうかは不明である。遺物は土師器・須恵器、灰釉陶器が出土し、よって平安時代の住居址と思われる。



第16号 住居址カマド実測図

（飯塚政美）

## 第Ⅲ章 遺 物

## 第1節 土 器

第5図(1～2)は第11号住居址の旧より出土した土師器であり、(2)はカマド付近より出土している。(1～2)ともに回転糸切り底を呈す。(5～26)は第11号住居址の新より出土した土師器である。(5～6)は土師器の杯であり、(6)は糸切り状を呈している。(7～26)は内黒土器の一派であり、(17)の皿型を除いて他は全て杯に含まれると思われる。(7～8)は墨書き土器である。(18～26)は回転糸切り底が多くなっている。

第6図(27～38)は第11号住居址の新しいより出土した遺物である。(27)は須恵器皿、(28～29)は須恵器杯、(34)は須恵器蓋、(35)は須恵器小壺である。(30)は灰釉陶器の皿、(31)は灰釉陶器の杯である。

(32)は土師器内黒片口鉢であり、一ヵ所に小さな注ぎ口がみられ、極めて類例が少なく伊那市内では初めての出土である。(33～38)は土師器甕でいずれも底部は欠損しており、内、外側ともに横位ナデである。(37)は土師器小形甕で、外側にカキ目がみられ、ロクロ整形がゆきとどいている。

(39～42)は第12号住居址出土遺物である4つとも土師器内黒杯で(39～40)は墨書きの跡がみられ、(41～42)は回転糸切り底である。

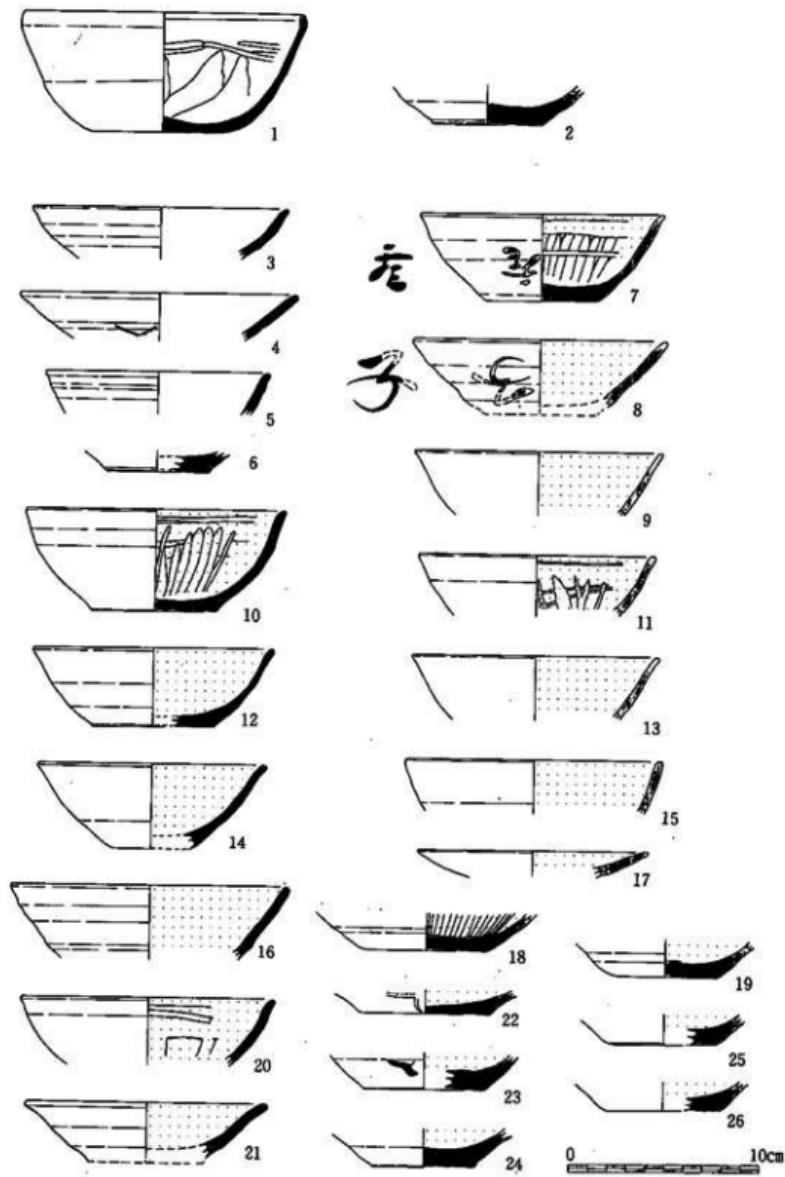
第7図(43～48)は第12号住居址より、(49～59)は第13号住居址より出土した遺物である。(43～44)は灰釉陶器杯、(45)は灰釉陶器皿、(46)は灰釉陶器の壺である。(47)は土師器長胴甕であり、口縁部の内・外側は横位ナデ、外側にススが付着している。内面の調整は雑であり、輪積痕が明瞭である。覆母を含み、焼成は悪い。

(49～55)は土師器杯であり、全て内面はミガキがかかっており、(54～55)の底部は回転糸切り底である。(56～59)は内黒土器であり、(56、59)は墨書きを持った土器である。(56、58～59)は回転糸切り状を呈す。

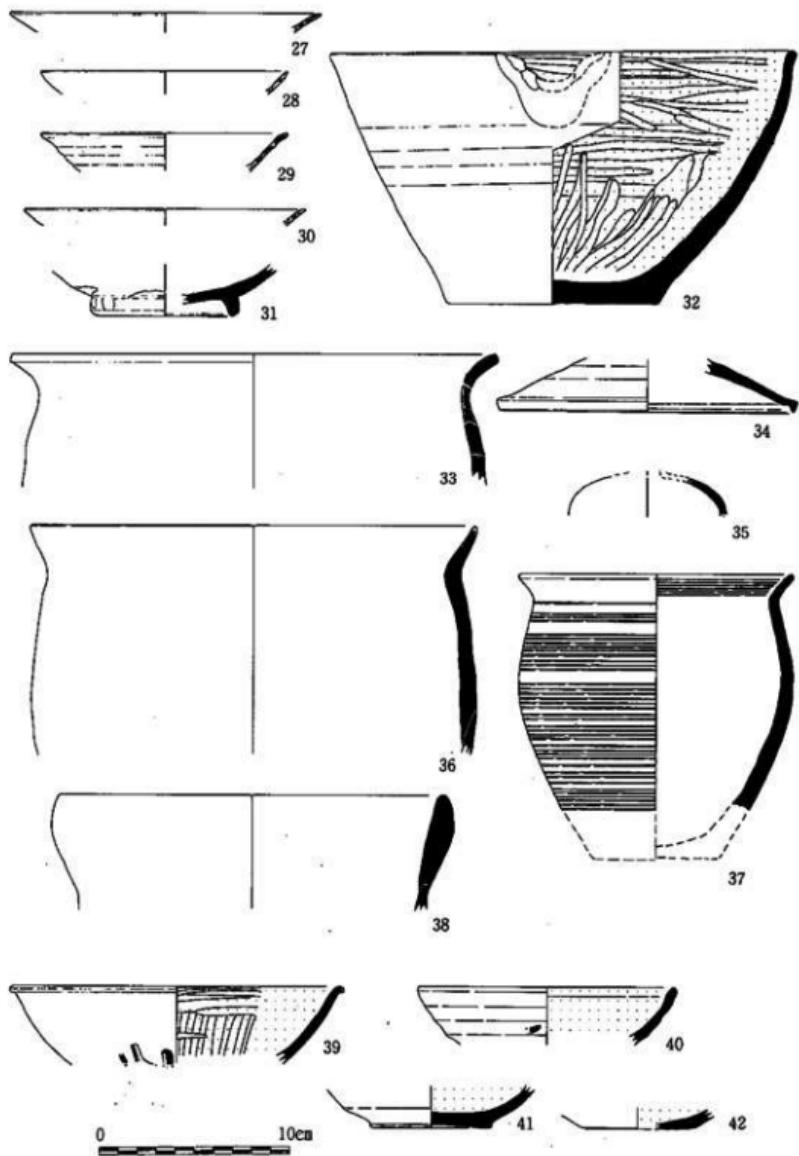
第8図(60～68)は第13号住居址から、(69～90)は第14号住居址より出土した遺物である。土師器の内黒土器で皿型を呈す(60)。(61～66)は須恵器の杯で、ロクロ痕が明瞭にみられ、(66)は糸切り底になっている。(67)は土師器甕、(68)は土師器小型甕となっている。(67)はロクロ成形がゆきとどき、外側にわずかにカキ目を残す。(68)の外側は荒れているが、内面には横位ナデを施してある。

(69～73)は土師器の杯であり、(69、71)の内面はミガキかれている。(73)は回転糸切り底を呈す。(74～78)は土師器内黒土器で杯状を呈し、(77～78)は回転糸切り底になっている。(79～81)は須恵器の杯であり、回転糸切り底(79)になっている。(82～90)は灰釉陶器の杯である。

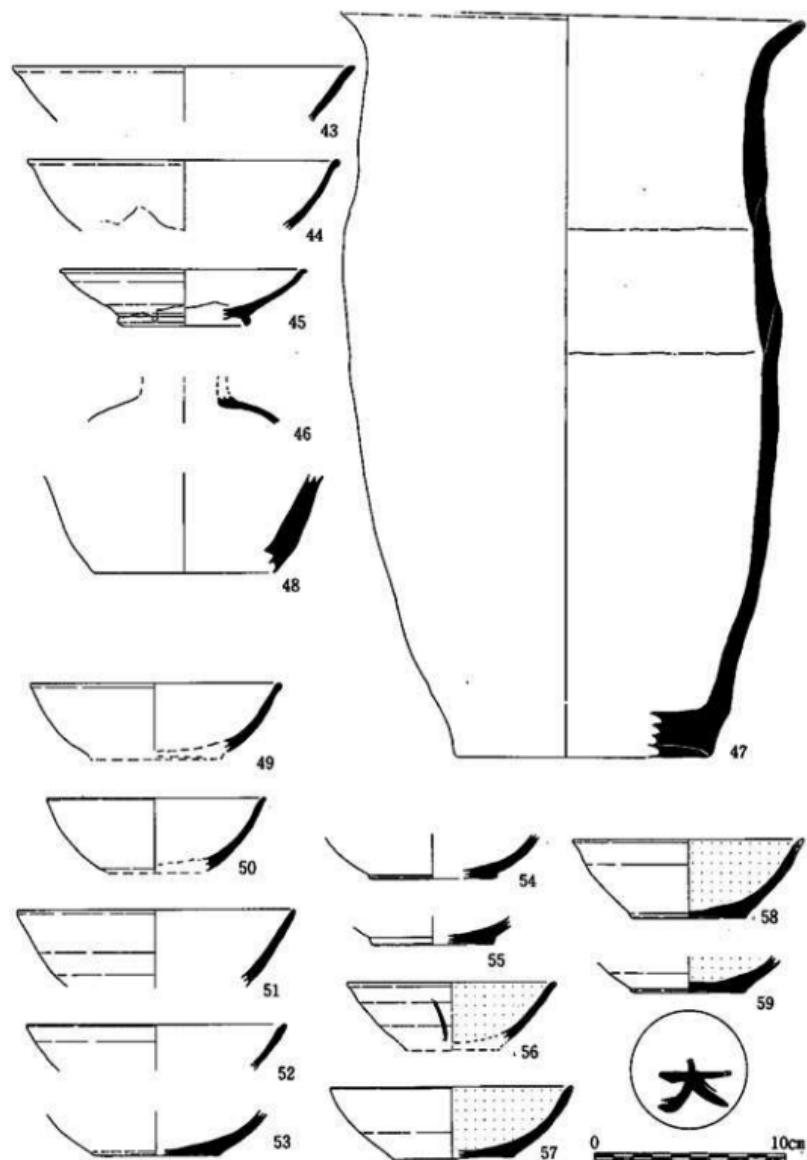
第9図(91～103)は第14号住居址、(104～107)は第15号住居址より出土した遺物である。(91～94)は灰釉陶器の皿、(92～93)は灰釉陶器の杯、(95～96)は灰釉陶器長頸壺の口縁部破片と思われる。(97～98)は近世の陶器片で後世の飛び込みであろう。(99)は須恵器の甕である。(100)は土師



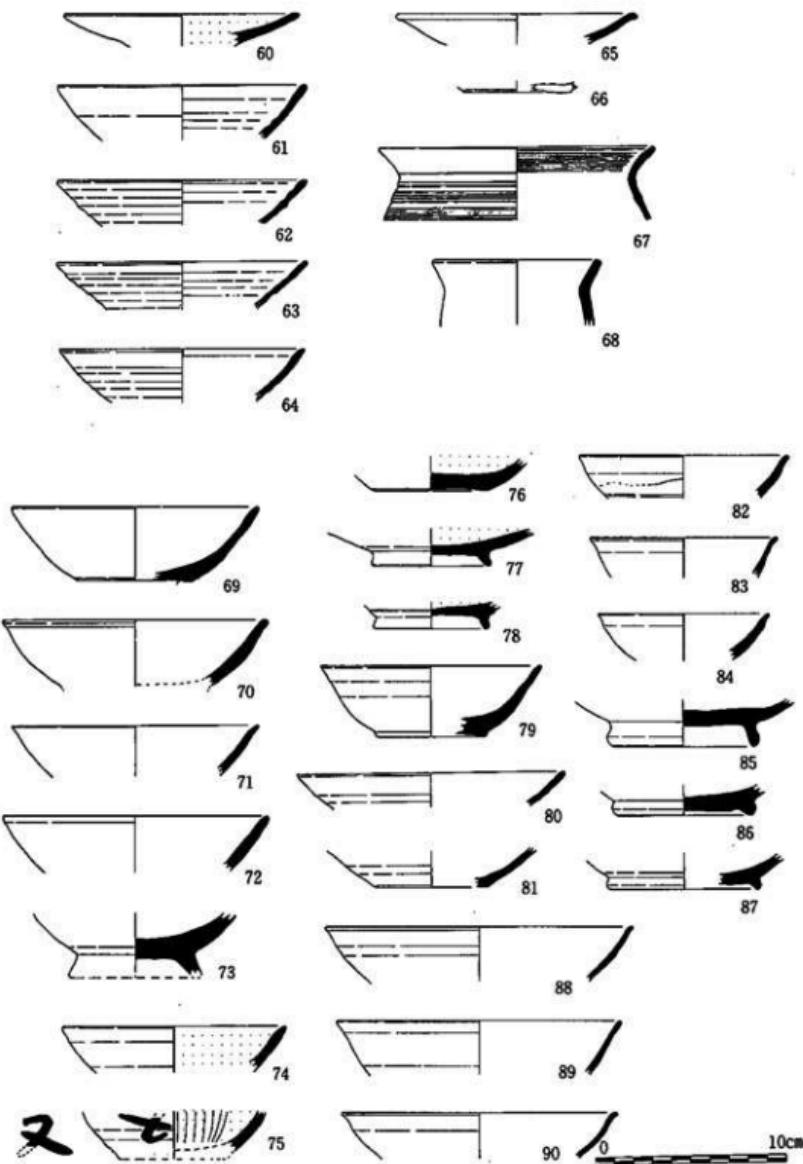
第5図 土器器実測図 11位 (IB)(1~2), 11位 (新)(3~26)



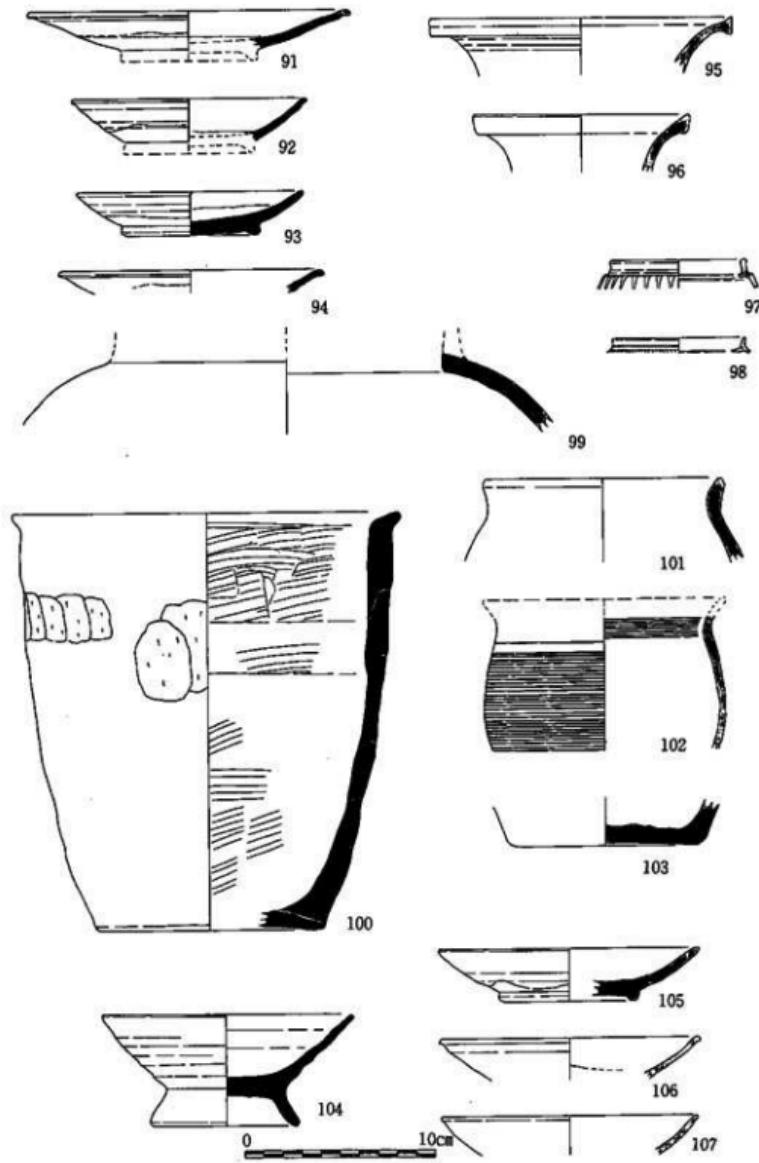
第6図 土師・須恵・灰釉陶器実測図11件 新(27~38), 12件 (39~42)



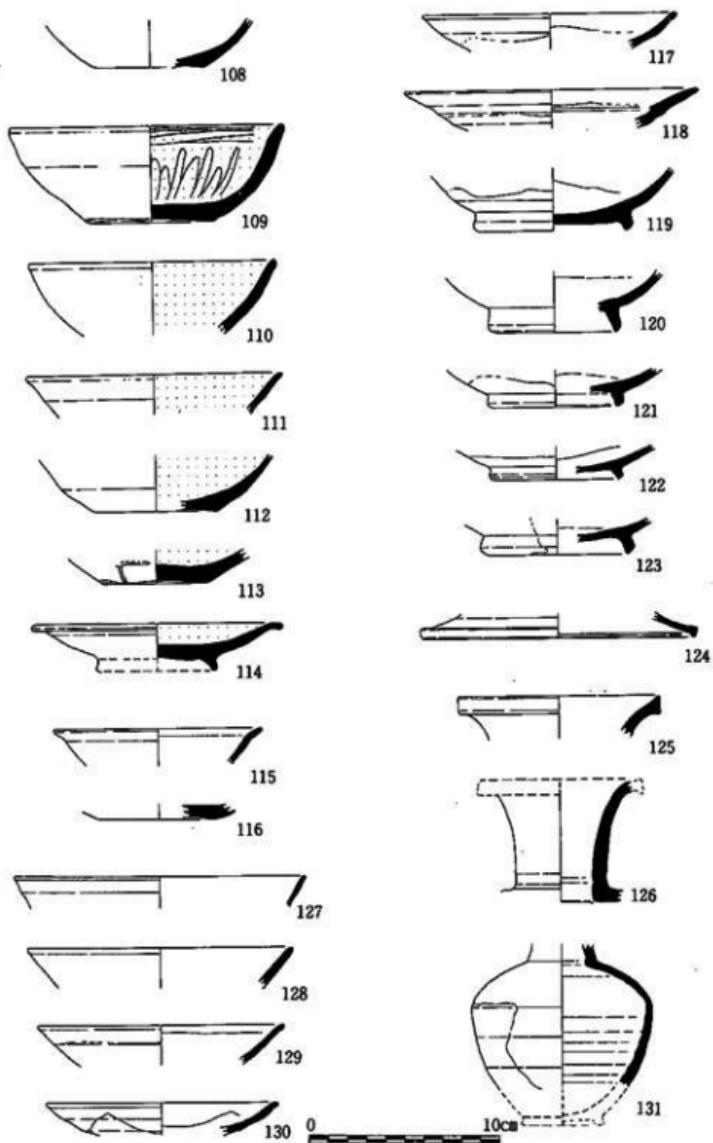
第7図 土器・灰釉陶器実測図 12住 (43~48), 13住 (49~59)



第8図 土器・須恵・灰釉陶器実測図 13件 (60~68), 14件 (69~90)



第9図 土器・須恵・灰釉陶器実測図 14件 (91~99), 15件 (100~107)



第10図 土器・須恵・灰釉陶器実測図 16件 (108~131)

## 第Ⅲ章 遺 物

器の裏、(101～103)は土師器の小型壺である。(100)の内面には部分的にハケ目や横位ナデ、外側にはケズリや縦位ナデを施してあり、部分的にススが付着している。(101)の外側は軽いカキ目、内側は横位ナデ、(102)はロクロ成形、(103)の外側はハケ目を施してある。

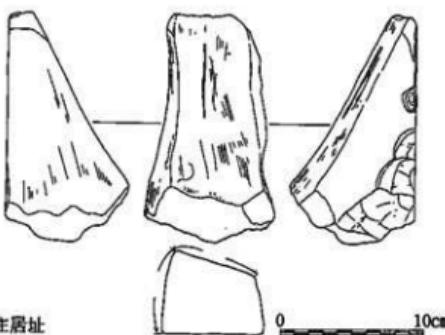
(104)は土師器高台付杯であり、ロクロ整形が見事である。(105～107)は灰釉陶器の杯である。

第10図(108～131)は第16号住居址出土遺物である。(108～114)は内黒土器であり、(108～111)は杯、(109, 110, 112)は鉢型、(114)は皿型を呈す。(108)は回転糸切り、(109)は静止糸切りである。(115～116)は須恵器の杯である。(117～130)は灰釉陶器で、(117)は杯、(118)は段皿、(119～120)は碗、(127～129)は杯、(130)は皿状を呈している。(119)は回転糸切りである。(124)は須恵器の蓋、(125)は灰釉陶器長頸壺の口縁部破片、(126)は須恵器長頸壺、(127)は灰釉陶器小型長頸壺と思われる。

(飯塚政美)

## 第2節 石 器 (第11図)

本図の石器は砥石であり、断面図に表示した矢印の範囲内は砥石面になっているところである。砥石としては割合に大型であり、油分の多く含んだ石を利用している。第14号住居址発掘調査中最初に発見された遺物である。



## 第3節 鉄製品 (第12図)



本図の鉄製品は第14号住居址のP<sub>2</sub>より出土しているが、形態からして釘のように思われるが、断面が角状を呈しており、本住居址と結びつくかは疑問がある。ちなみに、本住居址一帯は後世の搅乱がいじじらしい、その状態はローム層深くまで達していた。 (飯塚政美)

第11図 石器実測図

第12図  
鉄製品  
実測図

## 第Ⅳ章 まとめ

調査の都合上、遺跡地をわけて調査した。整理の面から困難が生じないために、検出された遺構は芝王遺跡から通し番号によって命名してある。芝王B遺跡に該当する遺構は第11号住居址、第12号住居址、第13号住居址、第14号住居址、第15号住居址、第16号住居址である。

これら6軒の住居址の時代及び平面プラン、さらに規模を記すと次のようになる。

第11号住居址は奈良時代で、隅丸方形状を呈し、南北5m40cm、東西5m55cm。第11号住居址の新しい方からは灰釉陶器の出土がみられた。第12号住居址は平安時代で、隅丸方形状で、南北4m75cm、東西不明。第13号住居址は奈良時代で、隅丸長方形、東西6m、南北不明。第14号住居址は平安時代で隅丸方形状で、南北不明、東西4m30cm。第15号住居址は平安時代で、隅丸方形状、南北5m、東西不明。

第16号住居址は平安時代で、隅丸方形状、南北不明、東西不明。

第13号住居址から第16号住居址の4軒は極めて複雑な切り合い関係を呈しており、それらをごく簡単に記してみる。

第13号住居址を第14号住居址が切っている。第14号住居址は第13号住居址を切ってあり、第14号住居址の南西の一隅は貼り床をして第15号住居址にしてある。第15号住居址は南東の一部分は第14号住居址に貼り床し、北壁は第16号住居址に切られている。第16号住居址は南壁で第15号住居址を切り、南東の一部は第14号住居址に貼り床をしてある。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器の出土が多かった。土師器のうちで、第11号住居址から出土した土師器内黒の片口鉢は伊那市内でも唯一のものである。全般的に内黒の土器が多くあった。

また、第11号住居址には墨書き器片の出土がみられた。この墨書きは一字と言ふように、画一化されていた。いままでに伊那市内で墨書き器が発見された遺跡名と所在地を記すと次のようになる。

山本田代遺跡—伊那市西春近山本。御殿場遺跡—伊那市富県北福地。砂場遺跡—伊那市手良中坪。福島遺跡—伊那市福島。和手遺跡—伊那市西春近諏訪形。山の根遺跡—伊那市西春近山本。

第14号住居址から出土した砥石は大型であり、よって、家の中に常に据えてあり、使用したのであろう。

全般的にみて、土師器は真間の新しいところから、国分期の古い所に、須恵器はⅢ式に、灰釉陶器は9世紀後半から10世紀はじめに位置づけられている。

最後に本調査が無事完了し、報告書が刊行されるようになったのは南信土地改良事務所職員一同、あるいは、地元土地改良区役員の方々、さらに調査団の諸先生、作業員の皆様による熱意のたわものと思い深く感謝致します。

(飯塚政美)

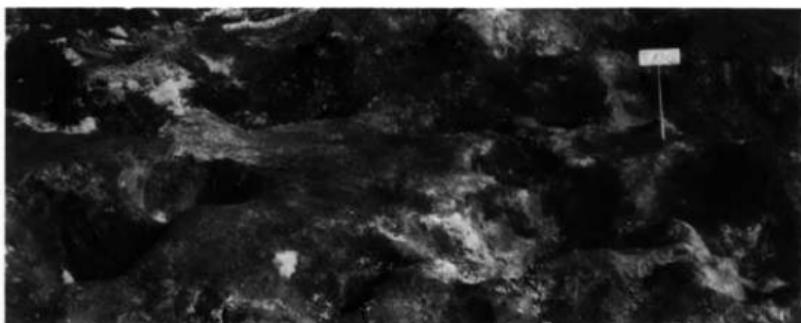
# 図 版



第11~12号住居址



第13~16号住居址



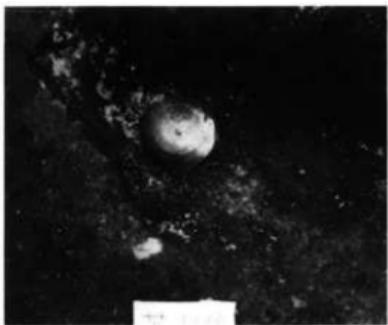
第13号住居址カマド



第14号住居址カマド



第16号住居址カマド



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況

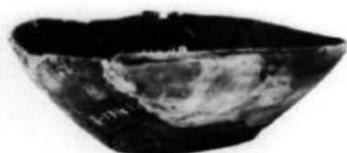


土器出土狀況



①・③～⑤第11号住居址出土土師器  
②第12号住居址出土土師器

⑥



⑦



⑧



⑨

⑥第13号住居址土師器 ⑦第15号住居址土師器  
⑧第16号住居址土師器 ⑨墨畫土器

---

## 芝王遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和59年3月17日 印刷

昭和59年3月17日 発行

発行 長野県伊那市教育委員会

印刷 はおづき書籍株式会社

---

